

2026年 オープン データ インフラストラクチャ レポート

AI、ガバナンス、そしてOpenSearch
導入の動向

2026年9月

Csilla Zsigri, *Research Analyst & Strategist*
Adrienn Lawson, *The Linux Foundation*
Hilary Carter, *The Linux Foundation*

Foreword by Bianca Lewis,
OpenSearch Software Foundation

2026年オープン データ インフラストラクチャ レポート

組織の44%は、専用ツールを備えた単一のコアプラットフォームを好み、80%はコストを大幅に削減できるのであれば、より少ないプラットフォームに統合したいと考えています。



データ インフラストラクチャに関連するAIのユースケースにおいて、Gen AIとLLMを活用したアプリケーションは明らかにトップであり、82%の組織がこれらを挙げています。



組織の78%が、データ インフラストラクチャを評価する際に、ベンダー間およびツール間の相互運用性が極めて重要だと回答しています。



総所有コスト(80%)とセキュリティおよびコンプライアンス(79%)は、企業がデータインフラストラクチャプラットフォームに求める要素の上位を占めています。



ハイブリッド検索(キーワード検索とセマンティック検索を組み合わせたもの)は、現在、組織の68%にとって推奨されるアプローチとなっています。



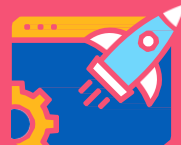
データ インフラストラクチャに関する主なリスク懸念事項は、セキュリティの脆弱性(58%)、規制遵守と複数のツールにわたるデータ漏洩(それぞれ33%)、ベンダー ロックイン(32%)です。



AIワークロードの運用、または運用計画は、あらゆる地域において少なくとも83%の組織で標準的な慣行となっており、大企業では90%を超えています。



組織の71%が、特定のベンダーやクラウド プロバイダーに依存しないインフラストラクチャの展開は戦略的な優先事項であると回答しています。



OpenSearchの認知度は、2024年の68%から2026年には89%に上昇しました。



OpenSearch の上位のユースケースは、検索と取得(91%)、ログ分析と可観測性(83%)、リアルタイム分析とオペレーショナル インテリジェンス(70%)です。



組織の77%がOpenSearchをAIに関連するものと捉えており、44%がAIの中核インフラと位置付けています。また、62%が既にAIワークロードでOpenSearchを利用しています。



OpenSearchの実運用導入率は、2024年から2026年の間に19%から36%へとほぼ倍増し、さらに36%がテスト中または導入を計画しています。



目次

序文.....	4
エグゼクティブ サマリー.....	5
データ インフラストラクチャの優先順位.....	6
AIの勢い.....	12
OpenSearchの認識.....	14
OpenSearchの勢い.....	17
コミュニティと財団.....	22
まとめ.....	24
方法論.....	25
付録.....	29

序文

私がOpenSearch Software Foundationの初代事務局長に就任したのは、ちょうど1年前のことです。当時、私はこのエコシステムのベンダー側から参加しました。長年、検索および分析技術を中心としたビジネスを構築してきた経験から、OpenSearchがどのようなものかを理解していると思っていました。しかし、それがどのようなものへと変貌していくのか、私には理解できませんでしたし、理解しようとも思いませんでした。

5年前、OpenSearchはフォークとして始まりました。AWSは2021年にOpenSearchを開発しました。これは、ElasticsearchとKibanaのライセンスがプロプライエタリになった際に、コミュニティがそれらに代わるオープンな選択肢を必要とし、しかもオープンな状態が維持されると信頼できるものを求めていたためです。まさに必要に迫られて生まれたプロジェクトでした。2024年、その必要性はより強固なものへと発展しました。プロジェクトはLinux Foundationのオープン ガバナンスの下に移管され、新たに設立されたOpenSearch Software Foundationがその管理者となりました。OpenSearch Software Foundationは、単なる善意ではなく、規約によってベンダー ニュートラルな立場を確立しました。この瞬間、OpenSearchはフォークではなく、コミュニティ全体のための独自のデータ インフラストラクチャ プラットフォームへと進化を遂げたのです。

この5周年記念調査レポートは、その変化がこれほど明確なデータで示されているのを初めて目にしたものであり、正直なところ、これほど急速に数字が伸びるとは予想していませんでした。OpenSearchの認知度は、わずか2年間で組織の68%から89%に急上昇しました。本番環境での導入率は19%から36%へとほぼ倍増しています。さらに36%の組織が現在テスト中、または導入を計画しており、これはつまり、現在OpenSearchを積極的に評価している組織の数が、既に本番環境で運用している組織の数とほぼ同数であることを意味します。これはひっそりと継続しているプロジェクトではなく、まさにブレイクスルーを果たしているプロジェクトなのです。

しかし、私が最も興奮しているのは、この動きがどこで、なぜ起こっているのかということです。これは、特定の地域、特定の業界、特定の企業規模に集中しているわけではありません。北米、ヨーロッパ、アジア太平洋地域全体で、中小企業からグローバル企業まで、金融、小売、通信、公共部門など、あらゆる分野で導入が進んでいます。そして、組織がOpenSearchを採用する理由として、AIがますます重要になっています。ベクトル検索機能が組み込まれたOpenSearchは、当初からGenAIの重要な要素でした。現在、組織の83%がAIワークロードを実行中、または実行を

計画しており、OpenSearchを導入しているチームのうち、62%が既にAIパイプラインの基盤としてOpenSearchを活用しています。44%は、OpenSearchを単なるアドオンではなく、コアAIインフラストラクチャとみなしています。ミートアップやOpenSearchConで実務担当者と話をする際、彼らが最も熱く語るのは、まさにこの点です。つまり、検索、ベクトル検索、そしてAIアプリケーションが本番環境で確実に動作することを保証する可観測性といった基盤の上にOpenSearchが構築されており、しかも特定のベンダーのロードマップに縛られることなく、これらの機能を実現できるということです。

データが示す事実についても正直にお伝えしたいと思います。なぜなら、それが私が書きたい序文だからです。データによると、私たちの最大の成長の原動力は、OpenSearchを試してもらうよう人々に働きかけるのではなく、現在実験的なシステムや交換可能なシステムを使用している60%の組織が、それらをミッションクリティカルなインフラストラクチャへと移行できるよう支援することにあります。財団に参加できる組織のほとんどは、まだ参加していません。障壁となっているのは、OpenSearchを拒否する人々ではなく、私たちが埋めることができる認知度と専門知識のギャップです。これは私がこれまで受け取った中で最も明確なToDoリストだと捉えており、今後1年間、このコミュニティと共にこのリストに取り組んでいくつもりです。

5年後、私たちのコミュニティのメンバーに、この研究の序文を寄稿してもらいたいと思っています。その序文には、「信頼できるAIインフラストラクチャの10年間を振り返る。単なる導入にとどまらず、苦勞して築き上げた信頼の証」と書いてもらいたいです。このレポートの内容に基づけば、私たちはまさにその道を歩んでいると確信しています。OpenSearchを本番環境で運用している方、AIスタックへの導入を検討している方、あるいはファウンデーションへの参加を検討している方、どなたでもこれらの数字を詳しく見て、私たちと共に次の5年間で築いていきましょう。

今年、このアンケートにご協力いただいた方、インタビューにご参加いただいた方、問題を報告してくださった方、文書を作成してくださった方、コミュニティ ミーティングにご参加いただいた方、すべての方に感謝申し上げます。このレポートは、まさにあなた自身についてのものです。

Bianca Lewis
Executive Director,
OpenSearch Software Foundation

エグゼクティブ サマリー

OpenSearchは、AWS主導のもと、ElasticsearchとKibanaのフォークとして2021年に誕生しました。2024年には、OpenSearch Software Foundationの設立に伴い、Linux Foundationの下でオープンガバナンス体制へと移行し、ベンダーニュートラルでコミュニティ主導のプロジェクトとしての地位を正式に確立しました。本レポートは、OpenSearchの5周年を記念するものです。

2026年オープンデータインフラストラクチャレポートは、Linux Foundation Researchが実施した2026年データインフラストラクチャ調査の結果を提示し、組織がデータインフラストラクチャにどのように取り組んでいるか、そしてOpenSearchが現在その状況の中でどのような位置づけにあるかを検証しています。この調査結果は、ITベンダー、エンドユーザー組織、独立系コンサルタントなど、さまざまな業界、企業規模、地域にわたる294名の回答者に基づいています。さらに、2026年7月と8月には、調査参加者とLF ResearchおよびOpenSearchのリーダーシップによる公募参加者から選ばれたボランティアを対象に、11名の専門家へのインタビューを実施しました。

おそらく最も重要な発見は、OpenSearchが大きな飛躍を遂げたことでしょう。認知度は2024年の68%から2026年には89%に急上昇し、実運用導入率は19%から36%へとほぼ倍増しました。さらに36%の組織が既にOpenSearchをテスト中、または導入を計画しているため、現在OpenSearchを評価している組織の数は、既に実運用でOpenSearchを使用している組織の数とほぼ同数になります。

この導入曲線は、AIへの移行と並行して展開しています。AIワークロードは初期導入段階を過ぎ、現在では平均して83%以上の組織で稼働中または計画中であり、地域や企業規模によっては、この数字は92%に達する可能性があります。OpenSearchは、検索/取得や分析/可観測性といったコアユースケースですでに機能しており、AIワークロードにも意味のある規模で使用されています（組織の62%）。

これは、コスト、セキュリティ、ベンダー非依存性という市場独自の購入基準と一致しており、OpenSearchの現在の機能とほぼ一致しています。認識データもこの一致を裏付けています。

OpenSearchは、エンタープライズ対応とベンダー中立性の両方で概ね肯定的に評価されており、組織の44%がこれをコアAIインフラストラクチャと見えています。

とはいえ、今後の最大のチャンスは、初期導入の規模ではなく、利用の深化にある。現在の導入事例の60%は、まだ実験段階、あるいは運用段階だが交換可能な段階にとどまっており、深く定着しているとは言えない。これは、試験運用中の大規模かつ活発なユーザー層であり、本格的なミッションクリティカルな利用へと成熟する余地が十分にある。成熟化を阻む障壁は、根本的な反対意見ではなく、認識や専門知識の不足に起因する実用的で解決可能なものであるため、さらなる成熟化は特に容易に達成できるだろう。

同様の傾向は、OpenSearch Software Foundation自体にも当てはまります。会員数は拡大する態勢が整っており、新規会員を惹きつける要素（投資対効果、企業での利用可能性、ベンダー中立性）は、プラットフォーム導入を促進する基準と一致しています。オープンソースコミュニティや開発者フォーラムは既に大規模な企業ユーザーにリーチしており、こうした認知度向上を通じて会員数の増加につなげる既存のチャンネルとなっています。

端的に言えば、OpenSearchは、その成長に最も関連性の高い意思決定者や実務担当者間で、高い認知度と支持を獲得してきました。データは、次の段階が明確であることを示しています。それは、試用版を本番運用に移行し、本番運用をミッションクリティカルな業務へと発展させ、コア機能とAI機能の両方をより広範に活用し、認知度を高めたユーザーを財団会員へとつなげることです。

データ インフラストラクチャの優先順位

データインフラストラクチャ、つまり組織がデータの収集、保存、管理、処理、およびそこから価値抽出を行うために利用する検索、分析、可観測性、および関連プラットフォームとツールは、戦略的な優先事項となっています。データ量の増加、データタイプの多様化、ユースケースの進化と増加に伴い、組織はプラットフォームの機能だけでなく、一度に実行できるタスクの数、運用と保守にかかるコスト、自社のデータとベンダーとの関係に対する制御の度合いなど、さまざまな要素をますます重視するようになっていきます。

統合された多目的プラットフォームは、特定のソリューションを凌駕

現代のデータインフラストラクチャは、多くのタスクを同時に処理するために必要とされています。図1に示すように、調査対象となったサンプル全体でユースケースは幅広く均等に分布しており、これは組織が単一のタスクに対応するのではなく、複数の目的に柔軟に対応できるプラットフォームを選択していることを意味します。AI関連のユースケースは、今日のデータインフラストラクチャに対する需要の中で最も急速に増加しているものの1つです。

図 1

関連組織におけるユースケース

2026年データインフラストラクチャ調査、質問10、N=294、「上記すべて」の選択肢を含む。完全なデータセットについては、付録A1を参照してください。



私たちの調査によると、全体的に見て、プラットフォームのメリットはベストオブブリードよりも魅力的であることが示唆されています。調査回答者の44%は、専門ツールを備えた単一のコア プラットフォームを好むのに対し、ユース ケースごとに最適な個別ツールを選択することを好むのは26%でした（図2参照）。

「組織は、コミュニティによって十分に実証された標準化されたツールを好む傾向があります。高度に専門化された個別のツールを管理するよりも、複数のユースケースに対応できる単一のコアプラットフォームを採用する方が明らかに好まれます。」

– ALFREDO SOTO NOLASCO, FULL STACK DEVELOPER, INDRA GROUP

とはいえ、ベストオブブリードのセグメントも依然として大きく、組織の26%がこれを優先オプションとして選択しています。また、その割合は企業規模によって異なり、大企業は統合プラットフォームを好む一方、中小企業はより多様なツール戦略を採用しています（付録A2.2の完全なデータセットを参照）。

図3は、統合プラットフォームへの選好が直接的な質問にも耐えうることを示しています。組織の80%は、コストが大幅に削減されるのであれば、より少ないプラットフォームに統合すると回答し、75%は、複数の専門システムを管理することは運用上の負担が大きすぎると回答しました。

しかし、コスト削減が統合の原動力となっている一方で、相互運用性は依然として譲れない要素である。組織の78%が、データインフラストラクチャを評価する際に、ベンダーやツール間の相互運用性が重要だと回答している（図3参照）。

「ネットワーク アーキテクチャではソフトウェアと基盤となるハードウェアがますます分離されているため、OpenSearch や SDN コントローラーなどのテクノロジーを含むプラットフォームがオープンAPIと標準ベースの相互運用性を維持することが重要です。これにより、組織は不必要なベンダーへの依存を回避し、時間の経過とともにインフラストラクチャを進化させる柔軟性を維持できます。」

— ANURADHA (ANU) UDUNUWARA, SENIOR ENGINEER, SRI LANKA TELECOM; TECH LEAD, XYNTAC ENTERPRISE

データインフラへの支出は重要だが、実務担当者には見えにくいことが多い

検索、分析、可観測性、および関連するデータインフラストラクチャへの年間平均支出額は約240万ドルです。図4に示すように、6桁から7桁の年間予算は、中堅企業以上（年間売上高2億5000万ドル以上）に集中しています

回答者の29%は、自社がデータ インフラにどれだけの費用をかけているかを知らない、あるいは確信が持てないと回答しており、

図 2

組織のツールに関する好み

2026年データインフラストラクチャ調査、Q11、N=294、1つ選択してください。完全なデータセットについては、付録A2.1～A2.2を参照してください。

44%

専用ツールを備えた単一のコアプラットフォームを好む

26%

用途ごとに最適な個別ツールを好む

図 3

統合と相互運用性に関する声明への同意

2026年データインフラストラクチャ調査、Q15、N=294。完全なデータセットについては付録A3を参照してください。

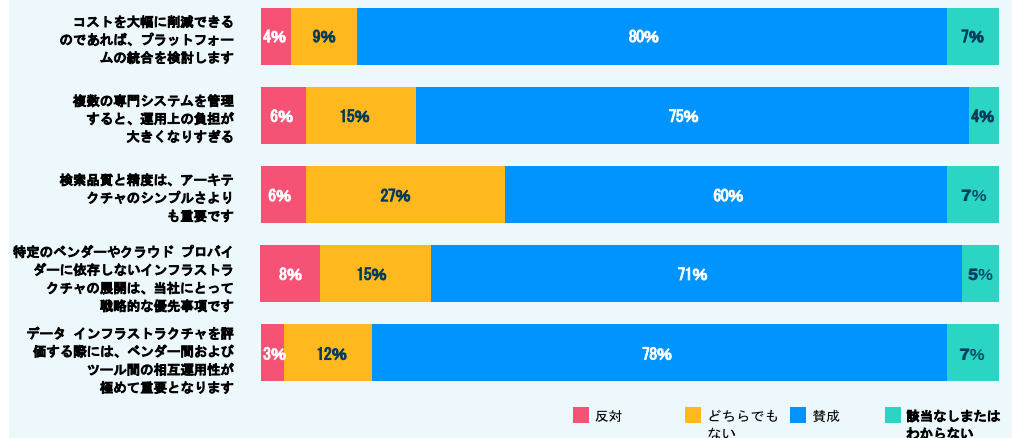
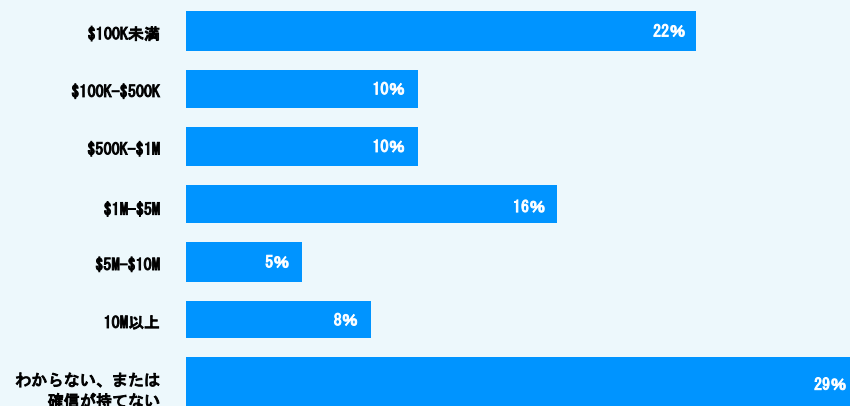


図 4

データ インフラストラクチャ プラットフォーム全体の年間概算支出額

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q22、N=294。完全なデータセットについては付録A4を参照してください。

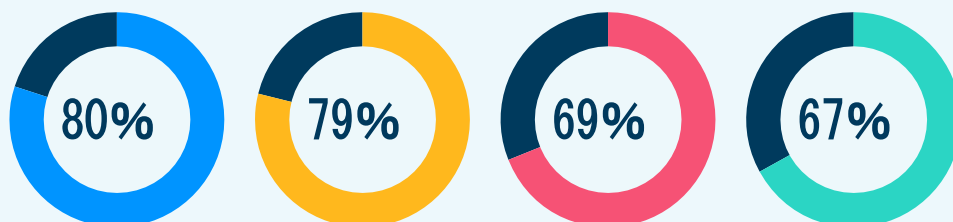


平均支出額は約240万ドルです

図 5

データ インフラストラクチャ プラットフォームを評価または選択する際に「非常に重要」と評価された基準

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q12、N=294、非常に重要。完全なデータセットについては付録A5を参照してください。



TCOは組織の80%にとって非常に重要です

セキュリティとコンプライアンスは、組織の79%にとって非常に重要です

ベンダーの独立性と導入の柔軟性は69%の組織にとって非常に重要です

企業の対応準備は、組織の67%にとって非常に重要です

これは、意思決定者は通常その数字を把握している一方で、実務担当者はしばしば把握していないという傾向と一致している。

「以前は、組織は高コストのコンピューティング ジョブの実行にあまり敏感ではありませんでしたが、経営陣はモデルのコストをますます厳しく制限し、アクセスを制限するようになりました。ライセンスと運用コストが累積するにつれて、チームはテクノロジーに関する意思決定を行う際にコストをはるかに意識するようになりました。」

— ACCORDING TO A MANAGER FROM A BIG FOUR CONSULTING FIRM

コスト、セキュリティ、ベンダーの独立性が購買決定の重要な基準となる

図5は、プラットフォーム選定において2つの基準が支配的であることを示している。それは、総所有コスト（TCO）（組織の80%にとって非常に重要）とセキュリティおよびコンプライアンス（79%にとって非常に重要）である。ベンダーの独立性と導入の柔軟性（69%）、そしてエンタープライズ対応性（67%）がそれに続く。

ベンダー独立の傾向と一致して、組織の71%が、特定のベンダーやクラウド プロバイダーに依存しないインフラストラクチャの展開を戦略的優先事項としていることに同意しています（図3）。

セキュリティは、データ インフラストラクチャにおける最大の懸念事項としても挙げられます。図6に示すように、セキュリティ脆弱性は、あらゆる組織規模と回答者の役割において、圧倒的に最も強いリスク シグナルとなっています。規制遵守、データ漏洩、ベンダーロックイン、運用上の複雑性がそれに続きます。外部からの脅威と依存関係のリスクがリスク登録簿の大半を占める一方、運用上の摩擦は低い順位となっています。

「データ プラットフォームを評価する上で、データ セキュリティは最優先事項ですが、それは基盤となるソフトウェアのバグだけでなく、ツールを適切に設定するための複雑さにも及びます。テクノロジーが安全な状態に到達するために多大な労力を必要とする場合、保守性が企業チームにとって大きな懸念事項となります。」

— ACCORDING TO A MANAGER FROM A BIG FOUR CONSULTING FIRM

ハイブリッド検索がデフォルトの想定です

検索アーキテクチャは従来、キーワード ベースのマッチングに依存し、用語の完全一致または近似一致に基づいて結果をランク付けしてきました。自然言語インターフェースとAI搭載アプリケーションが成熟するにつれ、文字通りのキーワード一致ではなく概念的な類似性に基づいて結果を取得するセマンティック検索とベクトル検索が、補完的なアプローチとして登場し、特に検索拡張生成などのユースケースに適しています。ハイブリッド検索は、精度を高めるためにキーワードマッチングを、文脈的関連性を高めるためにセマンティック／ベクトル検索を使用する両方の方法を組み合わせ、両者のトレードオフではなく、より包括的なソリューションとしてますます認識されるようになっていきます。

図7は、ハイブリッド検索が現在68%の組織にとって推奨されるアプローチであり、キーワードのみ（13%）や意味／ベクトルのみ（7%）の好みをはるかに上回っていることを示しています。

「わからない」または「確信が持てない」という回答が11%に上ったことは、ハイブリッド検索が実際に何を意味するのかについての理解不足が依然として存在することを示唆している。とはいえ、ハイブリッド検索はニッチな嗜好ではなく、市場全体に求められる要件となっている。

図 6

データ インフラストラクチャのリスクに関する最大の懸念事項

2026年データ インフラストラクチャ調査、第14問、N=294。完全なデータセットについては付録A6を参照してください。

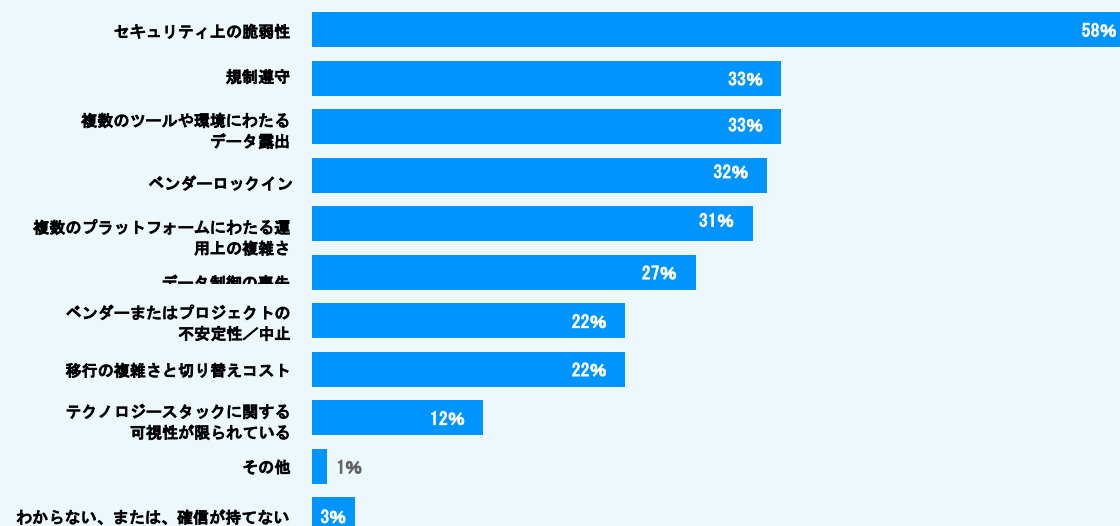
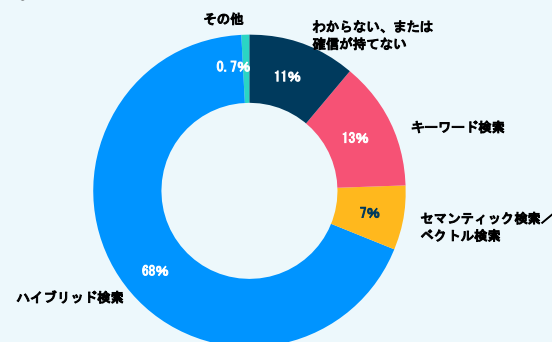


図 7

推奨される検索方法

2026年データインフラストラクチャ調査、Q13、N=294。完全なデータセットについては付録A7を参照してください。



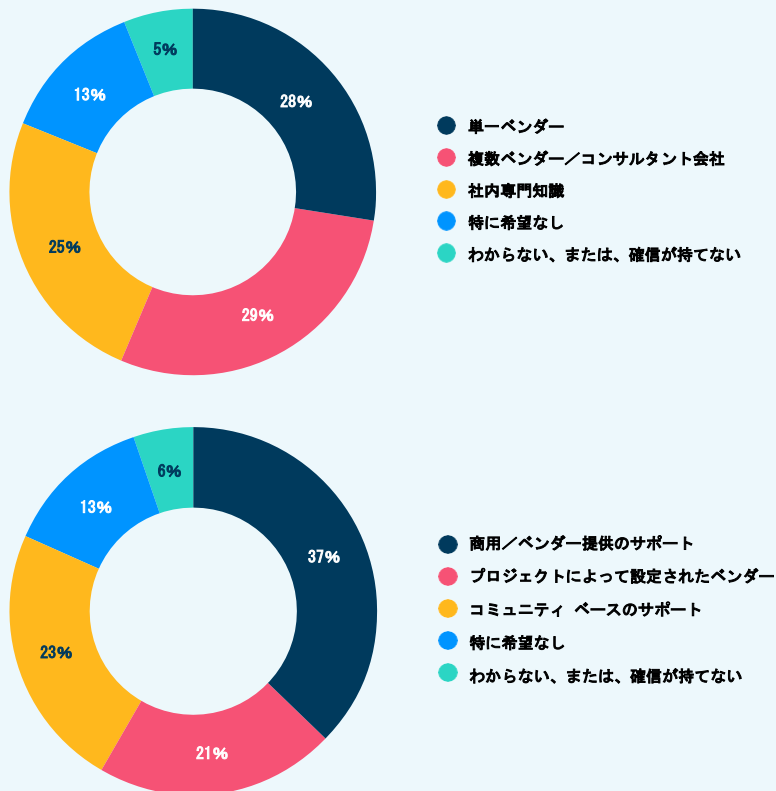
「OpenSearchは、広く知られたAPIを用いて様々な検索問題を解決できる万能ツールとして台頭し、標準的な検索ニーズに対する魅力的な選択肢となっています。しかし、複雑なクエリやランキングの問題、あるいは特定の大規模な問題に直面するチームは、よりカスタマイズされた、あるいは専門的なソリューションを必要とする場合が多いのです。」

— TREY GRAINGER, AI SEARCH CONSULTANT & FOUNDER, SEARCHKERNEL

図 8

優先ベンダーとの関係およびサポートモデル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第20問、N=294；第21問、N=291。完全なデータセットについては、付録A8.1～A8.2を参照してください。



万能なサポート モデルは存在しない

組織がデータインフラストラクチャのリソース配分とサポートをどのように行うかは、社内のスキル、リスク許容度、予算、プラットフォーム自体の成熟度など、さまざまな要因によって左右されます。一部の組織は、説明責任を簡素化し、調整の手間を削減するために、信頼できる単一のベンダーに集約しますが、他の組織は、特定のプロバイダーへの過度な依存を避けるために、複数のベンダーやコンサルタントと意図的に連携したり、外部への依存を完全に減らすために社内の専門知識の構築に投資したりします。

同様の検討事項は支援モデルにも及び、組織は商業的なベンダー保証契約の確実性と、コミュニティ主導型支援の柔軟性、あるいはプロジェクト認定プロバイダーの信頼性を比較検討します。

こうした様々な考慮事項は、調査データに明確に反映されています。ベンダーとの関係については、29%が複数のベンダーやコンサルタント会社との取引を好み、28%が単一のベンダーに集約することを好み、25%が社内の専門知識を構築することを好み、残りの回答者は明確な好みや不確実性を表明しています（図8の最初のグラフを参照）。

同様のトレードオフは、サポートの好みにも表れています。37%が商用ベンダーによるサポートを好み、23%がコミュニティベースのサポートを好み、21%がプロジェクト認定ベンダーを好みます（図8の2番目のグラフを参照）。これらの結果を総合すると、図8に示すように、すべてに当てはまる単一のモデルは存在しないという一貫した結論が得られます。

誰がどのようなサポートを好むかをさらに詳しく見ていくと、図9に示すように、3つの異なるサポート嗜好プロファイルが浮かび上がってきます。副社長/ディレクターおよび大企業は商用またはマルチベンダーのサポートを好む傾向があり、中堅企業はベンダー認定のサポートを強く求め、スタートアップ企業や実務担当者チーム

は、社内の専門知識とコミュニティベースのサポートを好む傾向が最も強いことがわかります。

長期サポート（LTS）の約束、つまりベンダーやプロジェクトが特定のリリースに対してセキュリティパッチ、バグ修正、互換性アップデートを保証する期間は、規制の枠組みが組織に対し、運用するソフトウェアに対する責任をますます強く求めるようになるにつれて、新たな重要性を帯びるようになりました。特に、EUのサイバーレジリエンス法（CRA）は、製造業者に対し、最低5年間、または製品の想定寿命が短い方に合わせてセキュリティアップデートを提供することを義務付けています。さらに、製造業者は製品サポート期間を明確に定義、開示、文書化することが求められており、組織は依存するインフラストラクチャのLTSの約束を理解し、それに基づいて計画を立てるようプレッシャーを受けています。

LTS（長期サポート）の期間については、2026年の調査によると、図10に示すように、期待値は大きく異なっています。24ヶ月と36ヶ月が最も一般的な最低期間として期待されており、特に大企業でその傾向が顕著です。一方、小規模組織ではより短いサイクルを好む傾向があります。回答者の20%は「わからない」または「確信が持てない」と回答しており、LTSポリシーとその影響が市場でまだ十分に理解されていないことがうかがえます。

「ソフトウェアの長期サポートを管理するには、迅速なターンアラウンドサイクルとレガシーシステムのライフサイクルとのバランスを取る必要があります。当初の基本設計は3～5年以内にアップデート可能なシステムを設計することですが、運用上の現実を考えると、エンジニアリングチームは最終的に数十年前のレガシーシステムの保守とサポートに対応できる体制を整えておく必要があります。」

– DARNELL OTTERSON, STAFF ENGINEER, DAIKIN APPLIED AMERICAS

図 9

設定プロファイルのサポート

2026年データ インフラストラクチャ調査、第20回調査（N=294）、第21回調査（N=291）。完全なデータセットについては、付録A9.1～A9.4を参照してください。

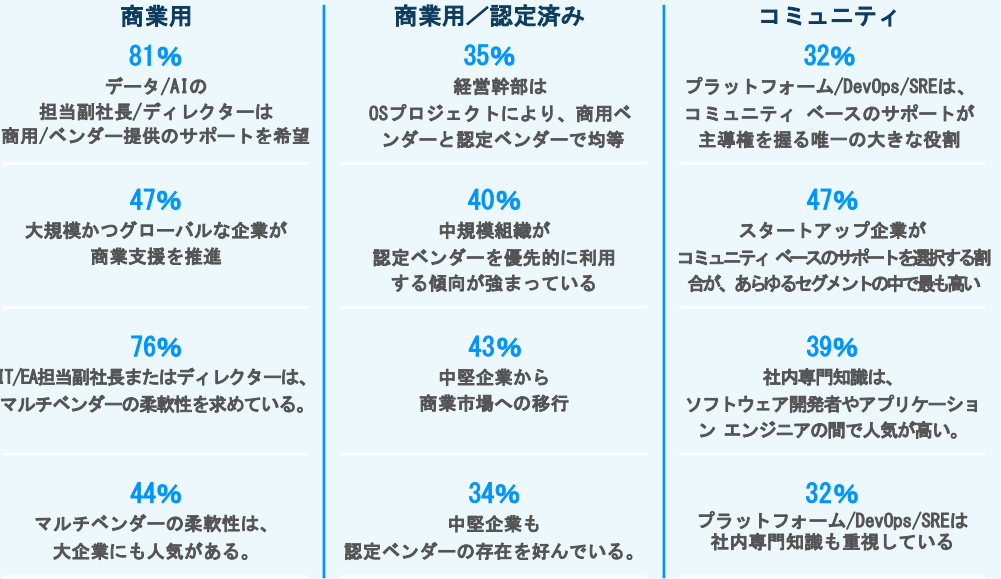
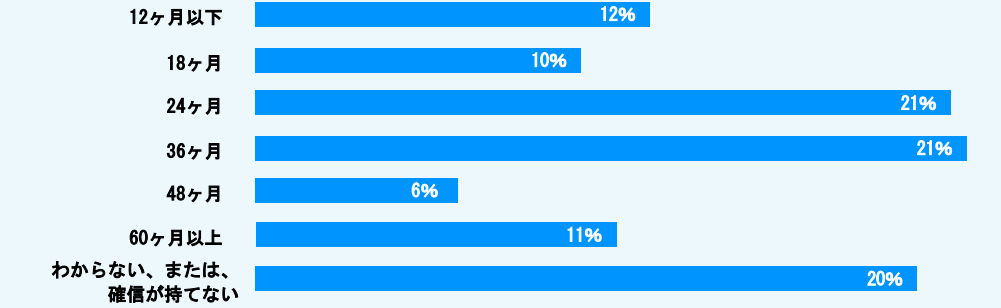


図 10

生産上重要なプラットフォームに求められる最低LTS期間

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q23、N=294。完全なデータセットについては、付録A10を参照してください。



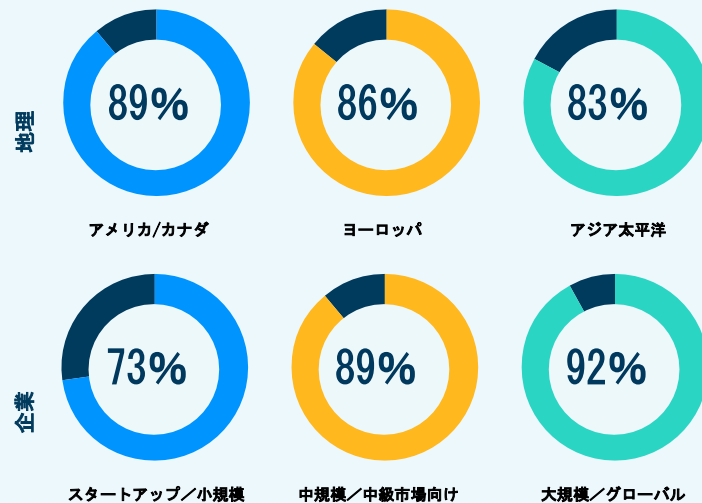
AIの勢い

人工知能は実験段階からインフラストラクチャ段階へと移行しました。組織が生成型AIアプリケーション、検索機能を強化した生成パイプライン、AI支援型分析および監視システムを構築するにつれ、情報の検索、インデックス作成、取得、監視を行う基盤となるデータプラットフォームは、モデルやアルゴリズムそのものと同様に、AIの成功に不可欠な要素となっています。検索および分析プラットフォームは、この移行において基礎的な役割を果たし、組織独自のデータに基づいてAIアプリケーションを構築する検索レイヤーと、AI搭載システムを本番環境で安定稼働させるための監視レイヤーを提供します。

図 11

AIワークロードを運用中または運用予定の組織 (地域別、企業規模別)

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q16、N=294、YES。完全なデータセットについては、付録A11.1～A11.2を参照してください。



AIワークロードがどれほど広く普及しているか、そして組織がそれらをサポートするためにデータインフラストラクチャに何を求めているかを理解することは、OpenSearchの市場における役割と位置付けを評価する上で不可欠な背景知識となる。

AIワークロードはほぼ普遍的であり、大規模になるとさらにその傾向が強まる

図11は、AIワークロードの運用または運用計画が地域を問わずほぼ普遍的であることを示しており、米国/カナダでは89%、ヨーロッパでは86%、アジア太平洋地域では83%の組織がAIワークロードを運用または運用計画している。AIワークロードへの取り組みは企業規模にも比例しており、小規模企業の73%がAIワークロードを運用または運用計画しているのに対し、中規模および中堅企業では89%、大規模およびグローバル企業では92%となっている。AIはもはや初期導入者だけの現象ではない。企業レベルのあらゆる分野において、AIは標準的な手法となっている。

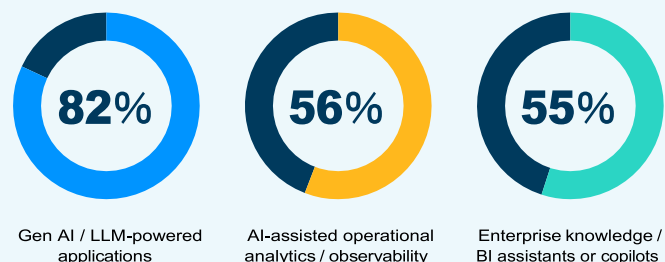
「企業が最先端のAIモデルを採用するにつれ、データ処理、保存、再利用、ガバナンスの管理は、経営陣レベルの優先事項になりつつあります。OpenSearchのようなオープンソース プラットフォームは、組織が企業内で安全な検索、文書保存、ベクトルベースのRAG機能を構築することを可能にします。成熟したRBAC、監査ログ、スナップショット管理などの機能は、機密データに対するより強力な保護を提供すると同時に、イノベーションを推進するために必要な柔軟性を維持します。」

– DAN SITHAMBARAM, GLOBAL PRACTICE LEAD, REDINGTON GROUP

図 12

主要なAI活用事例

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q17、N=245。完全なデータセットについては、付録A12を参照してください。



Gen AI/LLMを活用したアプリケーションがAIのユースケースをリード

図12に示すように、Gen AIとLLMを活用したアプリケーションは82%で圧倒的なリーダーであり、AI支援による運用分析と可観測性（56%）や企業知識とビジネス インテリジェンスのアシスタントまたはコパイロット（55%）を上回っています。

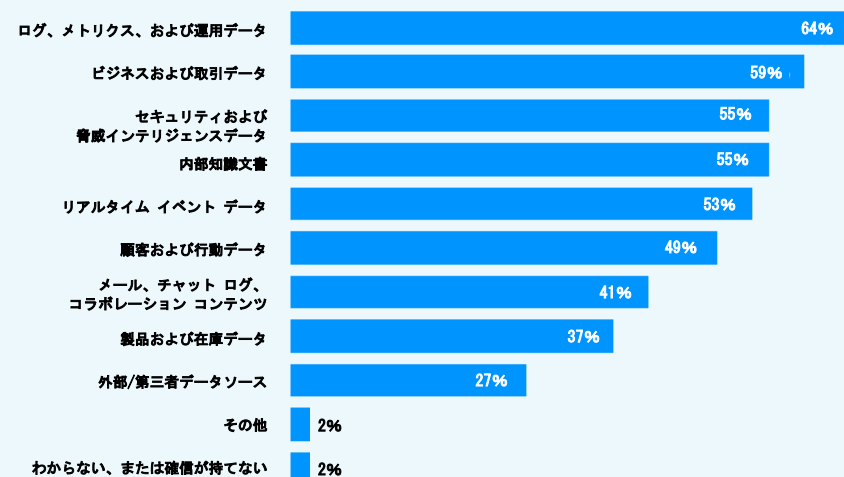
AIは広範なデータ基盤を活用するため、単一プラットフォームからのアクセスが重要

図13は、組織が幅広いデータを使用してAIアプリケーションを強化していることを示しています。ログ、メトリクス、運用データ（64%）、ビジネスおよびトランザクションデータ（59%）、セキュリティおよび脅威インテリジェンスデータ（55%）、内部知識ドキュメント（55%）、リアルタイム イベント データ（53%）はすべて、現在または計画的に相当な利用が見込まれています。

図 13

AIアプリケーションの動力源として使用されている、または使用される予定のデータ

2026年データインフラストラクチャ調査、Q18、N=245。完全なデータセットについては、付録A13.1を参照してください。



こうした幅広い意見がある一方で、組織の84%が、AIにとってデータへの単一プラットフォームからのアクセスが重要であると回答しており（付録A13.2の完全なデータセットを参照）、これは「データインフラストラクチャの優先事項」のセクションで見られた統合への嗜好を裏付けるものであり、AIの提供要件によってさらに明確化されている。

OpenSearchの認識

OpenSearchは、オープンソースの検索、分析、およびオブザーバビリティ プラットフォームであり、元々は2021年4月にElasticsearch (7.10.2) とKibana (7.10.2) からフォークされたもので、現在はLinux FoundationのOpenSearch Software Foundation (2024年9月以降) によって管理されています。2024年、Linux Foundation ResearchはOpenSearchの認知度と認識に関するベースライン調査を発表しました。それ以降、状況はどのように変化したのでしょうか？

意識が突破口を開きつつある

2024年には、組織の68%がOpenSearchについて少なくとも聞いたことがありましたが、2026年にはその割合は89%に達しました（図20の比較を参照）。今年の調査では、回答者の30%がOpenSearchについてよく知っていると回答し、37%がある程度知っていると回答し、22%がOpenSearchを知っているがあまりよく知らないと回答しました（図14）。

意思決定者の間では特に高い親近感が見られるが、これは実践的な技術経験というよりも、戦略的あるいは市場に対する認識を反映している可能性が高い。また、中規模以上の大企業では、小規模組織（スタートアップ企業や中小企業）よりも高い割合となっています。より詳細な内訳は、付録A14.2～A14.3をご覧ください。

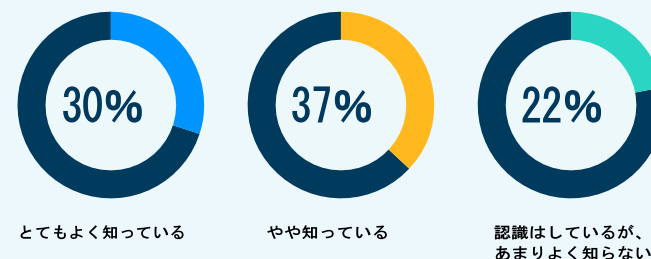
実務家はOpenSearchをオープンソースの検索、分析、およびオブザーバビリティプラットフォームと表現

図15に示すように、OpenSearchを自分の言葉で説明するよう求められた際、回答者が最も多く挙げたのは「検索と取得」（43回、最多テーマ）で、それに続いて「分析、可観測性、監視」（36回）が挙げられました。この2つは頻繁に一緒に挙げられており、実務チームが日々の業務で実際にどのように製品を使用しているかを反映しています。

図 14

OpenSearchに関する知識

2026年データインフラストラクチャ調査、Q25、N=294。完全なデータセットについては、付録A14.1～A14.4を参照してください。



「オブザーバビリティとMLOpsにも対応する検索オプションが
必要ですか？それならOpenSearchがあります。」

– VP / DIRECTOR ENGINEERING, INFRASTRUCTURE, OR PLATFORM

オープンソースのアイデンティティとコミュニティ主導のガバナンスも大きく取り上げられており（31件）、Elasticsearchとの比較やベンダー非依存という観点と密接に結びついています。少数ながら注目すべきは、AI機能に言及しているもの（10件）です。これらの回答は、より技術的に高度な内容で、OpenSearchがAIデータプラットフォームとして台頭しつつあることを説明しています。

図 15

回答者が OpenSearchをど のように表現し ているかを示す 主なテーマ

2026年データインフラストラクチャ調査、質問26、回答者数105名、自由回答、任意回答、テーマ別に分類し、言及数に基づいて順位付け。完全なデータセットについては付録A15を参照してください。

1. 検索 & 取得
(43言及 ▶ 47%)
回答者はOpenSearchを主に、データ、ログ、ドキュメント、またはアプリケーションを検索するための検索エンジンとして説明している。非常に専門的な説明から直感的な説明まで、幅広い内容が含まれる。

2. 分析、可観測性 & モニタリング
(36言及 ▶ 39%)
検索と併用されることが多い。コアとなる実務者のユースケースを反映しています。これがDevOps/SREエンジニアやプラットフォームエンジニアは、実際に日々その製品を使用しています。

3. オープンソース & コミュニティ
(31言及 ▶ 34%)
オープンソースのアイデンティティとコミュニティ主導のガバナンスが特に強調されている。このテーマは密接に関連していますElasticsearchと比較とベンダー独立性という観点。

4. Elasticsearchのフォーク/代体案
(26言及 ▶ 28%)
OpenSearchは、Elasticsearchの派生版、代替版、後継版、あるいはELKスタックの後継版として紹介されることが多い。その論調は概ね中立的である。一部の人々は今回のフォークを明確に肯定的に捉えている一方、少数派はAWSの役割について懐疑的である。

5. AI、ML & セマンティック検索
(10言及 ▶ 11%)
少数ながらも注目すべき回答として、AI機能に言及しているものがある。これらの回答は、より技術的に高度な内容であり、OpenSearchがAIデータプラットフォームとして台頭しつつあることを示している。

6. 拡張性、柔軟性、およびパフォーマンス
(10言及 ▶ 11%)
拡張性、柔軟性、分散アーキテクチャ、そしてパフォーマンスが、特徴的な属性として挙げられます。通常は単独で用いられるよりも、他のテーマと組み合わせられて用いられることが多いです。

7. 好意的な感情/コミュニティの擁護
(8言及 ▶ 9%)
熱意は感じられるものの、具体的な内容に乏しい回答が集まっている。これらは技術的な評価というよりも、ブランドに対する真の親しみやすさやコミュニティへの帰属意識を表している。

8. セキュリティ分析
(6言及 ▶ 7%)
セキュリティについて言及した6人の回答者は、より広範なマルチユースケースの説明の一部として、あるいは主要な視点としてセキュリティに言及している。セキュリティに関する記述は、実務家による技術的に高度な回答に最も多く見られる。

9. データ インフラストラクチャ/プラットフォーム
(6言及 ▶ 7%)
このテーマは、より抽象度の高い記述を捉えています。これらは、経営幹部や技術的な知識が少ない回答者からの、より短く戦略的な枠組みである傾向があります。

10. ベンダーの中立性と独立性
(4言及 ▶ 4%)
回答者のうち、ベンダーの独立性を説明の一部として明示的に挙げている人は少ないが、挙げている場合は、その思いは非常に強い。

エンタープライズ向けでベンダー ニューtralと認識されているが、改善の余地あり

図16に示すように、1から5の尺度で、回答者はOpenSearchのミッションクリティカルなエンタープライズワークロードへの対応能力を平均3.70、中立性/ベンダー非依存性を3.66と評価しており、いずれも中間値を上回っていることから、概ね肯定的ではあるものの、完全に肯定的ではない基本的な認識を示している。

図 16

ベンダー中立性と企業対応能力に関する平均評価

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q27、Q28、N=250。完全なデータセットについては、付録A16を参照してください。

★★★★☆ 3.66

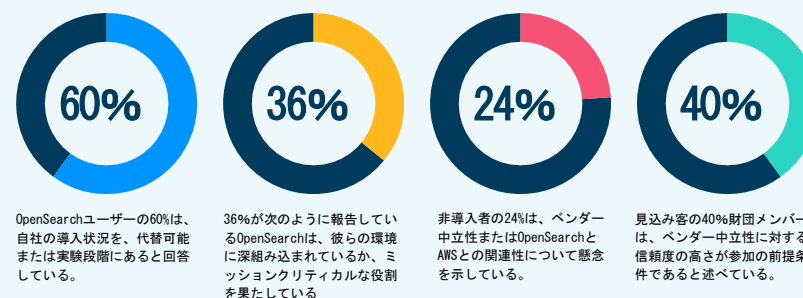
★★★★★ 3.70

図17は、認識とコミットメントが密接に関連していることを示しています。現在のOpenSearchユーザーの60%は、自身の導入状況を実験的または代替可能であると回答しているのに対し、36%はそれを深く組み込まれた、あるいはミッションクリティカルなものと回答しています。

図 17

組織はOpenSearchの導入状況をどのように説明するか

2026年データインフラストラクチャ調査、Q38、N=128 ; Q41、N=73 ; Q32、N=185。完全なデータセットについては、付録A21、A26、A30を参照してください。



非採用者側では、24%がOpenSearchとAWSの提携関係に起因するベンダー中立性への懸念を理由に不参加を表明しており、また、財団への入会を検討している者の40%が、ベンダー中立性に対するより高い信頼を参加の前提条件として挙げている。

AI関連分野であり、成長の余地あり

組織の77%がOpenSearchをAI全般に関連するものと捉えており、そのうち44%がコアAIインフラストラクチャ、33%がサポートコンポーネントと認識している（図18）。OpenSearchへの理解度が高いほど、プロジェクトをAIの中核と捉える傾向が強く、アクティブユーザーは非ユーザーよりもそのように捉える可能性が著しく高い（付録A18.2のデータ参照）。これは、OpenSearchをAIプラットフォームとして認識する能力は、実際に触れることで培われるものであり、触れる前から備わっているものではないことを示唆している。

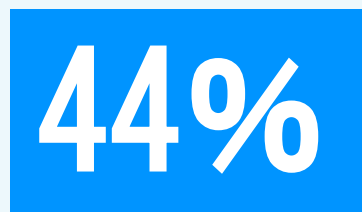
「データサイエンスプログラムを修了したAIおよび機械学習チームは、通常Pythonでのコーディングを好み、OpenSearchを最初を選択することは稀です。彼らは多くの場合、新しいツールで初期ソリューションを構築しますが、パイロット版が本番規模に達して限界に直面すると、改めてOpenSearchに挑戦し、アーキテクチャを再構築します。」

– ERIC PUGH, CO-FOUNDER, OPENSOURCE CONNECTIONS & MEMBER, OPENSEARCH TECHNICAL STEERING COMMITTEE

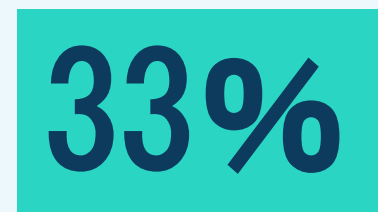
図 18

OpenSearchのAIに対する認識された関連性

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q29、N=250。完全なデータセットについては、付録A18.1～A18.2を参照してください。



OpenSearchを
AIアプリケーション
の中核インフラとして
捉える



OpenSearchを
AIアプリケーション
のサポートコンポーネ
ントとして捉える

OpenSearchの勢い

技術に対する認知度や認識は、必ずしも実際の利用方法に直結するとは限りません。導入は、時間の経過とともに導入状況がどのように成熟していくか、プラットフォームが実際にどのようなユースケースに対応できるか、組織がどのように運用・管理を行うか、そして未導入企業が依然として導入をためらっている理由など、さまざまな要因に左右されます。本調査結果は、OpenSearchがこれらの各側面においてどのような勢いを見せているかを明らかにしています。

認知から実稼働へ

図19は、現在OpenSearchを本番環境で積極的に利用している組織が36%、導入を検討中の組織が36%（テスト／開発段階が18%、導入計画段階が18%）であることを示しており、導入機会は現在のインストールベースとほぼ同規模です。本番環境での導入率は、特に北米の大企業で最も高く、ヨーロッパとアジア太平洋地域の中堅企業ではテスト／開発段階での利用が顕著であり、積極的な拡大の勢いを示している。

認知から導入への進展は、今年の調査データと2年前に収集されたデータを比較することで明らかになった最も強力なストーリーと言えるでしょう（図20）。OpenSearch Software Foundationは2024年9月に設立されました。2024年の基準値を確立するための調査は、OpenSearch Software Foundationが中立的なLinux Foundationプロジェクトとして設立される前の同年初めに実施されました。

2024年には、組織の68%がOpenSearchについて少なくとも聞いたことがありましたが、2026年にはその数字は89%に達しました。本番環境での実績はさらに顕著で、19%から36%へとほぼ倍増し、試用・実験段階の実績は11%から18%へと増加しました（図20）。

「当社がデータインフラ技術を活用し始めたのは、10年以上前の主要データプラットフォームの初期バージョンにまで遡ります。ライセンス変更によってそのエコシステムが混乱した際、まず中間的なディストリビューションに移行し、最終的にはOpenSearchに直接移行しました。現在、この技術を、グローバルなマネー ロンダリング対策、公共の安全、不正対策ソリューションなど、複数の主要分野で幅広く活用しています。」

– TERRY QUIGLEY, PRINCIPAL SOFTWARE DEVELOPER, SAS

図 19

テクノロジスタックにおけるOpenSearchの利用状況

2026年データインフラストラクチャ調査、Q34、N=245。完全なデータセットについては、付録A19.1～A19.3を参照してください。

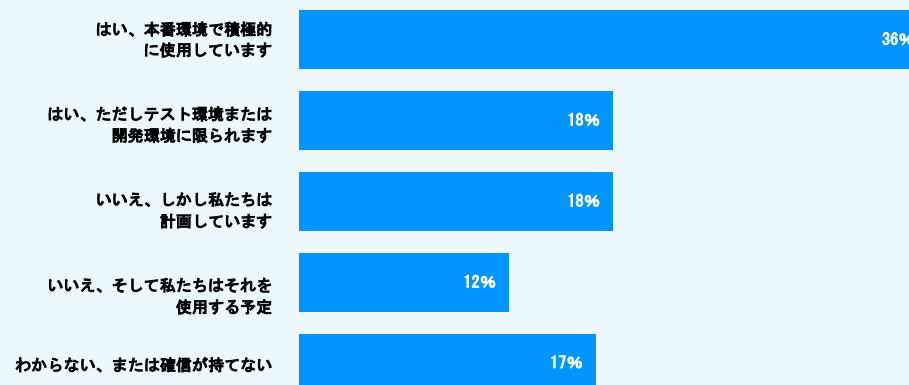


図 20

認知度と普及率：2026年と2024年の比較

2026年データ インフラストラクチャ調査（N=294）、2024年検索・分析調査（N=689）。完全なデータセットについては、付録A20、およびA14.1、A14.2、A19を参照してください。

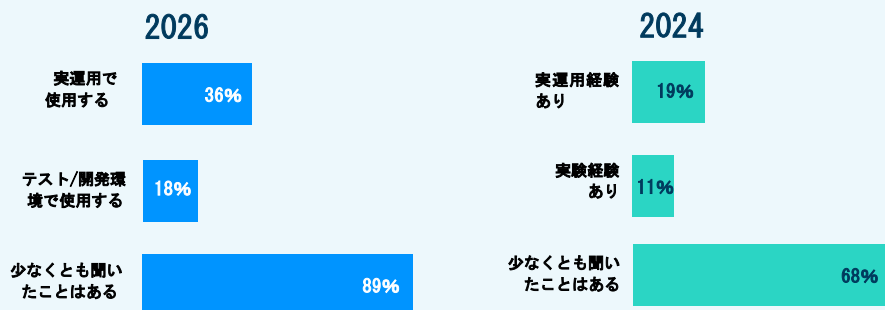
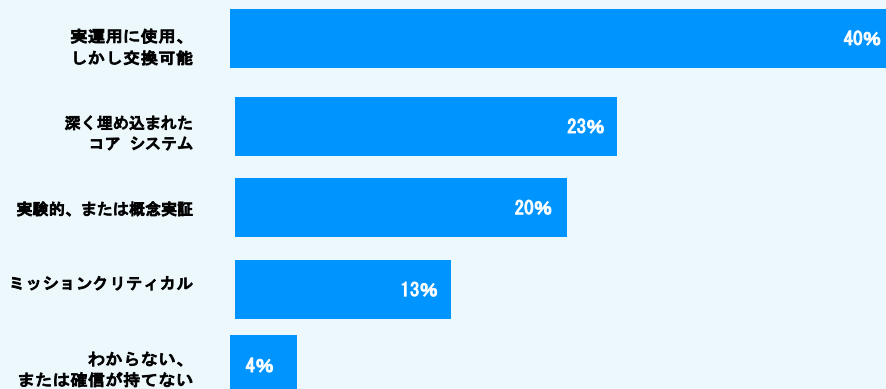


図 21

OpenSearchの導入深度

2026年データインフラストラクチャ調査、Q38、N=128。完全なデータセットについては、付録A21.1～A21.3を参照してください。



広く展開されているが、まだ深く根付いてはいない

製品の定着度とは、製品がユーザーの日常生活にどれだけ深く組み込まれているかを示す指標であり、その指標で見ると、OpenSearchは広く普及しているものの、現時点では定着率は限定的である。現在のユーザーのうち、60%がOpenSearchの導入状況を実験的または運用中だが交換可能と回答しており、40%が特に運用中だが交換可能と回答しているのに対し、36%は深く組み込まれている、またはミッションクリティカルであると回答している（図21）。

導入の深さは地域によって異なり、北米は最も定着した市場であり、ヨーロッパは普及が進んでいるものの、大部分は「代替可能」な段階にとどまっており、アジア太平洋地域は活発ではあるものの、まだほとんどが探索段階である（付録A21.2を参照）。

「OpenSearchは、親しみやすいオープンソースライセンスと活発なコミュニティのおかげで、Uberにとってミッションクリティカルなシステムとして信頼できる基盤となっています。」

— MINGMIN CHEN, DIRECTOR OF SOFTWARE ENGINEERING, UBER & MEMBER, OPENSEARCH GOVERNING BOARD

導入は自己管理型で、クラウドファースト、かつ中央集権的に管理される

運用面では、組織の60%がクラウド上でOpenSearchをセルフマネージドで運用し、48%がAmazon OpenSearch Serviceのマネージドサービスを利用し、9%が他のベンダーのマネージドサービスを利用し、43%がオンプレミスで、セルフマネージドで運用しています（図22参照）。単一のアプローチのみに依存している組織を絞り込むと、47%がセルフマネージドモードのみで展開し、38%がマネージドサービスとセルフマネージドを併用し、14%がマネージドサービスのみに依存しています。

地理的要因と企業規模によって、状況はさらに明確になります（表1と表2を参照）。EU市場はデータ主権に関する考慮事項を反映して最もバランスの取れたプロファイルを示しており、アジア太平洋地域は明確なマルチモーダルな展開を見せています。米国は、EUよりもクラウド重視で、アジア太平洋地域よりもマルチモーダル性が低く、マネージドオプションとしてAWSが主流であるため、あらゆる面で両者の中間に位置しています。

表 1
地域別OpenSearch展開状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q37、N=128、地域別

OPENSEARCHの導入	米国	欧州	アジア太平洋
オンプレミスで自己管理	35%	46%	81%
クラウド上で自己管理	69%	46%	68%
Amazon OpenSearch Serviceを介したマネージドサービス	57%	29%	63%
AWS以外のベンダーによるマネージドサービス	21%	11%	17%

企業規模別に見ると、スタートアップ企業や中小企業ではオンプレミスでの自己管理型導入が主流である一方、AWSマネージドサービスの導入が本格化する転換点は中堅企業にある。

表 2
企業規模別OpenSearch導入状況

2026年データインフラストラクチャ調査、第37問、N=128、企業規模

OPENSEARCHの導入	スタートアップ	小規模	中規模	中堅	大規模	グローバル
オンプレミスで自己管理	67%	78%	45%	40%	36%	41%
クラウド上で自己管理	58%	44%	65%	62%	66%	85%
Amazon OpenSearch Serviceを介したマネージドサービス	42%	22%	42%	67%	54%	67%
AWS以外のベンダーによるマネージドサービス	0%	11%	32%	11%	23%	19%

図 22
使用されているOpenSearchの導入形態

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q37、N=128、DKNSを除く。完全なデータセットについては、付録A22を参照してください。

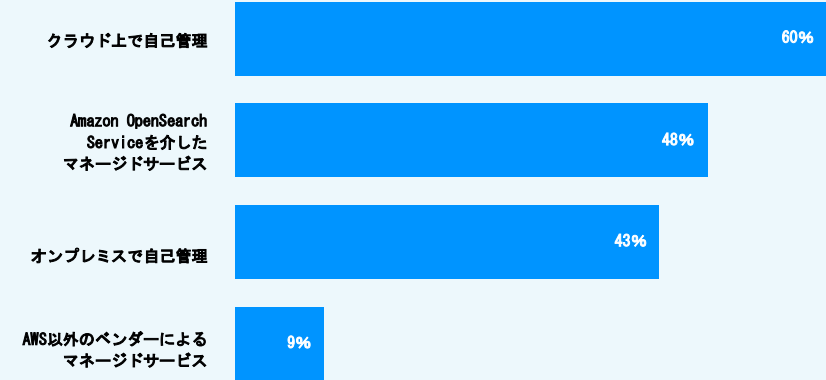
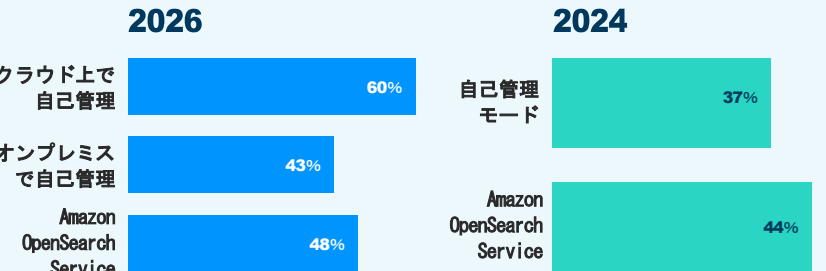


図 23
OpenSearch導入の進化
(2026年と2024年の比較)

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q37、N=126；2024年検索・分析調査、Q17、N=174；DKNSの回答は除外。完全なデータセットについては付録A23を参照してください。



コアユースケースとAIユースケースの両方に対応

図24は、アクティブユーザーの間でOpenSearchが幅広く利用されていることを示している。検索と取得（91%）とログ分析と可観測性（83%）が上位を占めており、これはOpenSearchの起源と中核的な強みを反映している。リアルタイム分析と運用インテリジェンス（70%）、AI関連のユースケース（62%）、ビジネスインテリジェンスとレポート作成（62%）がそれに続きます。AIとBIに関して「わからない、または確信が持てない」という回答が多いことは、能力のギャップではなく成長の余地があることを示唆しており、したがって、より深い導入の障壁は製品の品質ではなく、アクティベーションにあるようです（図25を参照）。

「当社は、厳格な規制遵守が求められる大手銀行や政府機関に国際的に製品を販売しているため、コアとなる検索機能とセキュリティ機能を多用しています。こうしたニーズから、当社はこのプロジェクトに直接貢献することになり、コア機能とセキュリティプラグインにおけるFIPS準拠の実現に向けて、開発者として時間を費やしてきました。」

— TERRY QUIGLEY, PRINCIPAL SOFTWARE DEVELOPER, SAS

「同意に基づく枠組みの中で機密性の高いデータを扱うには、厳格なプライバシー保護の約束を守るために、極めて高いカスタマイズ性が求められます。市販のソリューションはしばしばこうしたプライバシーの制約を侵害しますが、OpenSearchは、組織がユーザーの信頼を維持しながら集約データ層を維持できるカスタマイズ可能なフレームワークを提供します。」

— ART ABAL, MANAGING DIRECTOR, VANA FOUNDATION

図 24

OpenSearchがアクティブ ユーザーに提供しているもの

2026 Data Infrastructure Survey, Q36, N=128. For a complete dataset see Appendix A24.

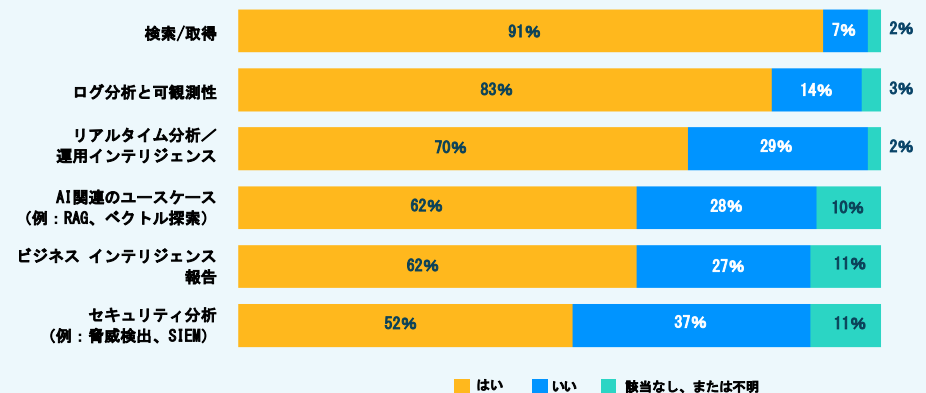


図 25

OpenSearchはどの程度その機能を提供しているか

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q40、N=128。機能評価はアクティブユーザーのみに基づいており、非導入企業は含まれていません。完全なデータセットについては、付録A25を参照してください。

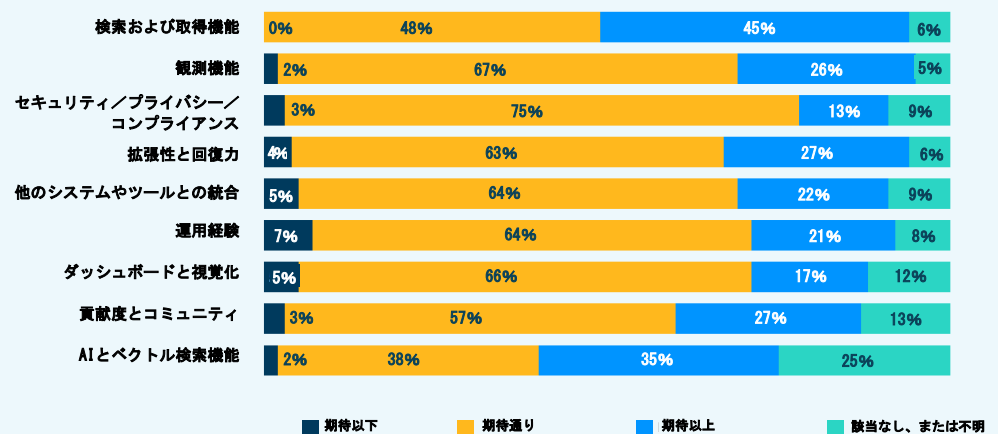


図 26

OpenSearchを採用しない主な理由

2026年データインフラストラクチャ調査、Q41、N=71、DKNS回答は除外。完全なデータセットについては付録A26を参照してください。

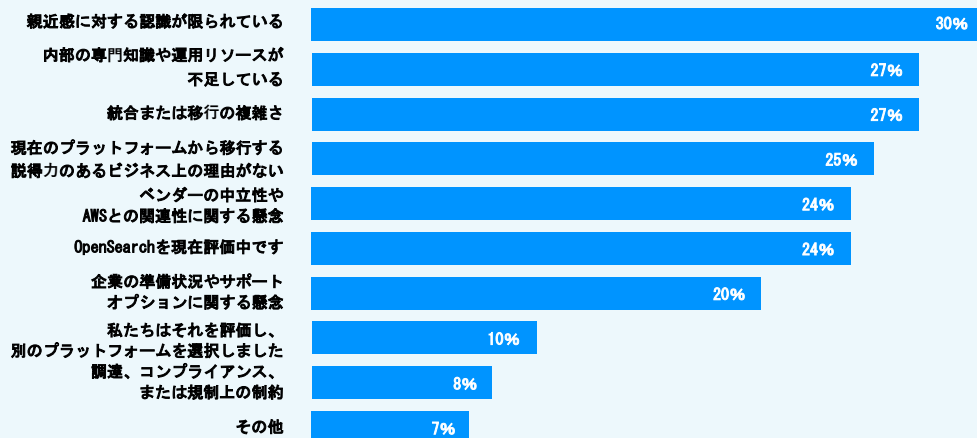
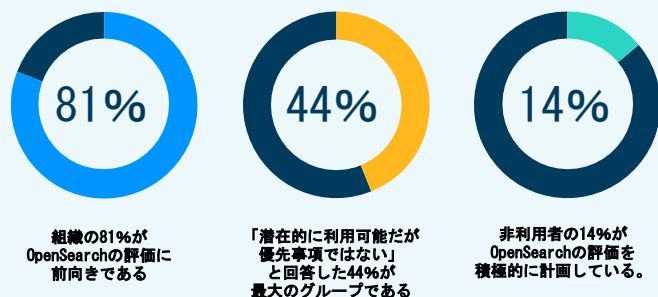


図 27

OpenSearchを評価する非ユーザー組織

2026年データインフラストラクチャ調査、Q42、N=73。完全なデータセットについては、付録A27を参照してください。



導入障壁は実地的なものであり、非利用者は評価に前向きで

図26は、OpenSearchを採用しない主な理由として、認知度や習熟度の低さ（30%）、社内の専門知識や運用リソースの不足（27%）、統合や移行の複雑さ（27%）を挙げ、次いで移行する説得力のあるビジネスケースがない（25%）、ベンダーニュートラル性／AWSとの関連性への懸念（24%）を挙げていることを示しています。

「検索および分析ソリューションをめぐる情報過多は、OpenSearchが実際に何を提供しているのか、そして中央集権型の市場ソリューションと比べてどうなのかという疑問を生じさせています。最大の課題は、まさに教育の問題です。多くの企業顧客やエンジニアリングチームは、OpenSearchが最新の技術スタックの中でどのような位置づけにあるのかを明確に理解していないのです。」

— ART ABAL, MANAGING DIRECTOR, VANA FOUNDATION

それと一致して、非ユーザーの81%はOpenSearchの評価に前向きだが、実際に評価を計画しているのはわずか14%に過ぎない。最も多いグループ（44%）はOpenSearchの評価には前向きだが、優先事項とは考えていない（図27）。

コミュニティと財団

オープンソース プロジェクトは、認知度、利用状況、製品の機能といった要素を超えて、周囲のエコシステムの強さに依存している。つまり、実践者が技術を発見し学ぶためのチャンネルや、長期的な管理、資金提供、中立的な監督を提供する財団などのガバナンス構造といった要素である。プロジェクトがこれらの側面でどれだけ優れた成果を上げるかは、今日の影響力だけでなく、長期的な回復力と独立性をも左右する。

オープンソース ソフトウェアと開発者 コミュニティが発見を支配

図28に示すように、オープンソース コミュニティとプロジェクトドキュメント（58%）と開発者コミュニティと技術フォーラム（45%）は、実務者と意思決定者の両方に情報を伝える情報チャンネルとして独自の階層を占めています。

アナリスト レポートは経営幹部や大企業にとって最も重要であり、ソーシャル メディアは経営幹部や中小企業の認知度向上に役立つ。しかし、実務家の間での普及は限られており、会議はあらゆる役割において一貫した接点となっている（付録A28.1～A28.3の完全なデータセットを参照）。

「コミュニティの関与を深めるためには、少人数の対面式ミーティングがエンジニアリングチームにとって非常に有益です。2、3社のエンジニアがホワイトボードを使って議論したり、プレゼンテーションを行ったり、技術的な経験を直接交換したりできる集中的なセッションは、強固なつながりを築くのに役立ちます。」

— MINGMIN CHEN, DIRECTOR OF SOFTWARE ENGINEERING, UBER & MEMBER, OPENSEARCH GOVERNING BOARD

図 28

人気の情報チャンネル

2026年データインフラストラクチャ調査、質問30、N=240、DKNS回答は除外。完全なデータセットについては、付録A28.1～A28.3を参照してください。



図 29

OpenSearch Software Foundation/ Linux Foundation 会員資格

2026年データインフラストラクチャ調査、第31問、N=250。完全なデータセットについては付録A29を参照してください

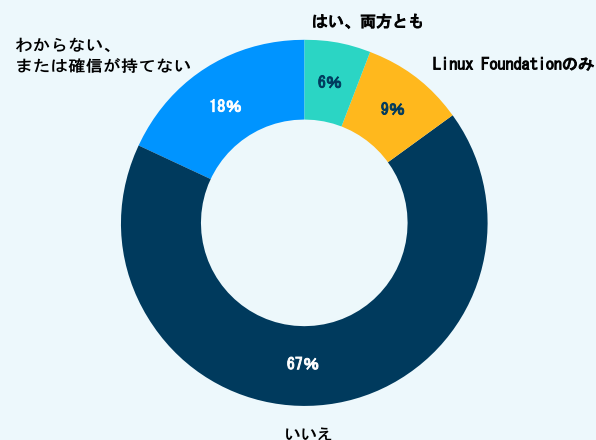


図 30

財団会員への入会特典

2026年データインフラストラクチャ調査、Q32、N=185。完全なデータセットについては、付録A30を参照してください。

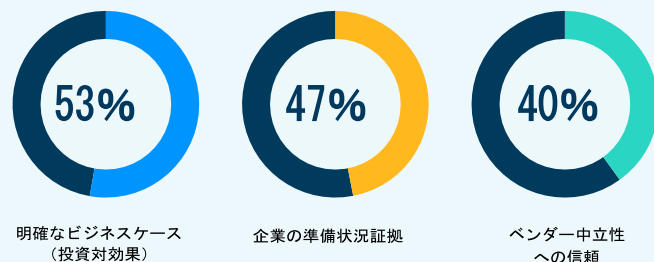
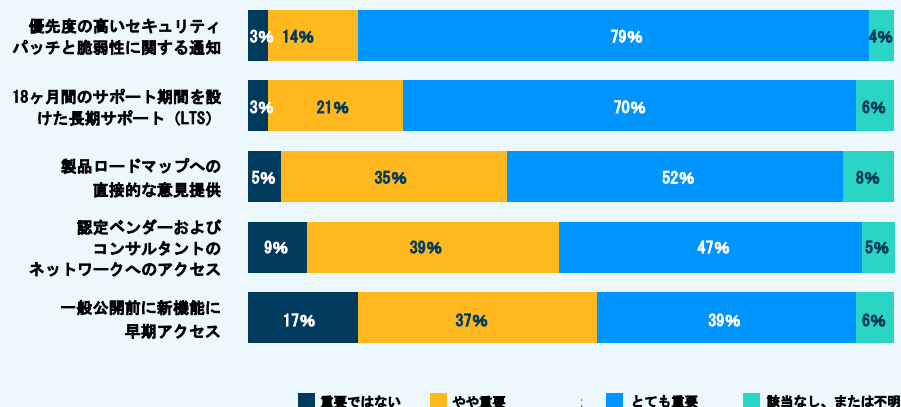


図 31

財団会員特典の重要性

2026年データインフラストラクチャ調査、Q33、N=185。完全なデータセットについては、付録A31を参照してください。



その影響力の大きさを考えると、今回の調査対象組織のうち、OpenSearch SoftwareFoundationとLinux Foundationの両方に加盟しているのはわずか6%、Linux Foundationのみに加盟しているのは9%、どちらにも加盟していないのは67%、そして残りの18%は不明または確信が持てないと回答しています。図29からもわかるように、財団への加盟にはまだまだ大きな成長の余地があります。

ビジネス ケース、企業の準備状況、ベンダー中立性は、最も明確な価値ポイント

財団への入会を検討している方にとって、特に重要な3つの価値提案が際立っています。それは、明確なビジネスケース／投資対効果（53%）、企業における導入準備状況の証明（47%）、そしてベンダー中立性への信頼（40%）です。これらのテーマは、数値こそ同じではありませんが、データ インフラストラクチャの優先順位付けに関するより広範な意思決定の基準となる要素と共通しています（図30）。

組織がメンバーシップを検討する際、優先的なセキュリティパッチと脆弱性通知（79%が非常に重要）と18か月のLTSウィンドウ（70%）が、将来的なメリットの中で最も重要視されています。新機能への早期アクセスは大きく後れを取っており（39%が非常に重要）、重要ではないと回答した割合が17%と有意に高い唯一のメリットです。このことから、財団の成長戦略は、ロードマップへのアクセスだけではなく、リスク軽減、サポートの約束、実績を前面に出す必要があることが改めて分かります（図31参照）。

「OpenSearchのオープンなガバナンス モデルとプロジェクト管理構造は、商業化を加速させる役割を果たし、独自のソリューションやベンチャーキャピタルが出資する競合製品と対等に競争するために必要な経営管理およびマーケティングの枠組みを提供します。」

— TREY GRAINGER, AI SEARCH CONSULTANT & FOUNDER, SEARCHKERNEL

まとめ

OpenSearchは2024年以降、認知度向上から実際の運用導入へと飛躍的な進歩を遂げ、特にコスト、セキュリティ、ベンダー非依存性といった市場独自の購買基準に対して優れた性能を発揮しています。

2026年までに、OpenSearchは既にその主要なユースケース（検索／情報取得、分析／可観測性など）において成果を上げており、AIワークロードにも十分な規模で導入され始めています。これは、AI自体が市場全体でほぼ普遍的なワークロードとなる時期と重なります。

今後の最大のチャンスは、初期の普及率よりも利用の深化にあると言えるでしょう。多くの組織が既にOpenSearchを利用している、あるいは積極的に試験運用を行っており、その多くにとって、次のステップは利用をさらに深め、その過程でAIの中核となるデータインフラへと拡張していくことです。

この傾向は今後も続くと予想されます。2024年以降、セルフマネージド型デプロイメントはAmazon OpenSearch Serviceの利用よりも速いペースで成長しており、デプロイメント戦略の多様化が進んでいることを示しています。導入を阻む残りの障壁は、实际的で解決可能なものばかりです（根本的な反対意見ではなく、理解や専門知識の不足が主な要因です）。また、あらゆるセグメントに適合する単一のサポートモデルは存在しないため、単一のデフォルト設定ではなく、柔軟で段階的なサービス提供が求められています。

財団についても同様の傾向が見られます。会員数には大きな成長の余地があり、新規会員を惹きつける要因（投資対効果、企業対応性、ベンダー中立性など）は、より広範なプラットフォーム選定の基準と一致しています。オープンソースコミュニティや開発者フォーラムは、意思決定者と実務者の両方を含むこの層にリーチするための主要なチャネルとなっており、こうした認知度向上を会員数増加につなげるための既存の手段を提供しています。

ベンダー非依存性は、組織がデータインフラストラクチャを評価する際に用いる最重要基準の一つであり、ベンダー中立性は、導入を見送る企業が挙げる理由の中でも特に多いものです。OpenSearchが中立的でベンダー非依存の基盤へと移行したことは、市場が依然として重要視している懸念に直接的に対応するものです。

方法論

本調査は、LF Researchが2026年第2四半期に実施したウェブ調査と詳細なインタビューを組み合わせたものです。調査とインタビューは、より広範なデータ インフラストラクチャ環境におけるOpenSearchの導入状況と、その今後の成長経路を検証するために設計されました。2024年に実施された先行調査では、OpenSearchの認知度と認識について調査しており、本レポートにおける前年比分析の基準値となっています。

回答者が、個人として、あるいは所属する組織を代表して正確に回答するのに十分な専門的経験を有していることを確認するため、広範な事前スクリーニング、調査中のスクリーニング質問、およびデータ収集後のデータ品質チェックを通じて、データ品質への対応を行いました。

調査データは、様々な業界のエンドユーザー組織に加え、ITベンダーやサービス プロバイダー、独立系コンサルタント、非営利団体、学術機関、政府機関から収集された。回答者は、複数の業種、企業規模、地域にわたっています。

この調査は、スクリーニング、回答者の属性、データインフラストラクチャの優先事項、AIインフラストラクチャの優先事項、OpenSearchの認識と導入状況、および財団の会員資格に関する44の質問で構成されていました。調査は2026年5月に実施されました。合計294名の回答者がウェブ調査に参加し、11名が詳細な定性インタビューに参加しました。

回答者について

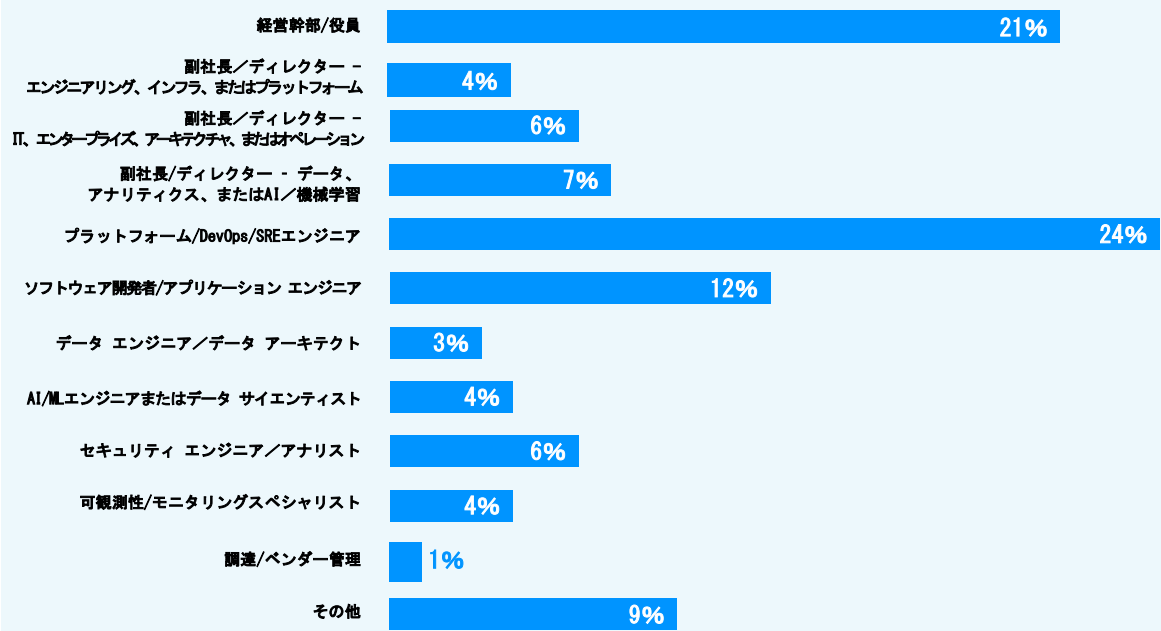
実務担当者が多く、意思決定者も十分に
代表されている構成

この調査は、戦略的な購買意思決定の視点と、日々の業務における実務者の視点の両方を捉えています。

図 32

回答者の役割：意思決定者 vs. 実務者

2026年データ インフラストラクチャ調査、第4四半期、N=294



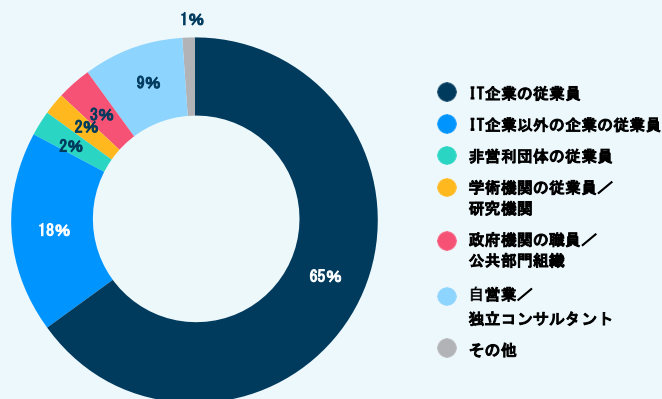
回答者の大多数はIT企業の従業員

回答者の65%はIT企業に勤務しており、残りの18%は非IT企業に勤務している。これら2社でサンプル全体の大多数を占める。残りは、独立系コンサルタント、非営利団体、学術・研究機関、政府・公共機関などに分散しており、それぞれ全体のわずかな割合を占めるに過ぎない

図 33

回答者の主な職業（組織の種類別）

2026年データインフラストラクチャ調査、第3四半期、N=294



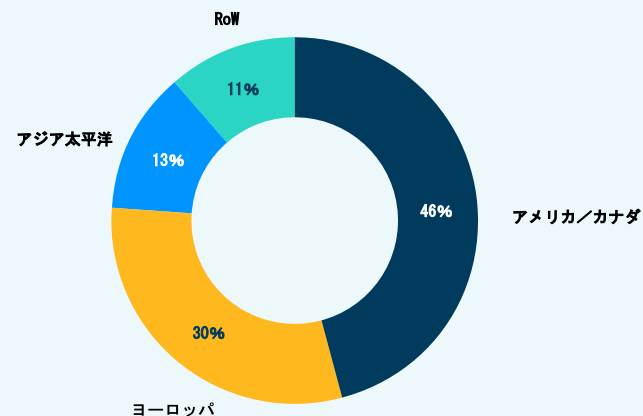
参加者は欧米市場に集中

回答企業の本社所在地は、主に米国・カナダ（46%）と欧州（30%）で、両地域を合わせるとサンプル全体の4分の3以上を占めています。残りはアジア太平洋地域（13%）とその他の地域（11%）です。本レポートの調査結果は、北米と欧州を最も代表するものであり、その他の地域については、対象範囲は狭いものの、依然として重要な情報が含まれています。

図 34

回答組織（本社所在地地域別）

2026年データインフラストラクチャ調査、第7問、N=294



回答した組織はあらゆる規模のリーン企業体に及ぶ

回答した組織は、創業間もないスタートアップからグローバル企業まで多岐にわたり、最も規模の大きいのは年間売上高10億ドル～100億ドルの大企業（24%）です。さらに規模別に見ると、大企業（年間売上高10億ドル以上）がサンプル全体の38%、中規模企業が29%、小規模企業（年間売上高5,000万ドル未満）が24%を占め、残りの9%は公共部門、非営利団体、その他の組織となっています。

データ アクセス

本レポートの基となる生データは、Linux Foundation Researchコミュニティ リポジトリ <https://zenodo.org/communities/linux-foundation-research> を通じてZenodoで公開されています。このデータセットには、匿名化されたすべてのアンケート回答が含まれており、適用されるオープン ライセンスの条件に基づき、自由にアクセス、ダウンロード、再利用できます。独自分析を実施したり、この研究成果を基に研究を進めたい研究者や実務家は、リポジトリを直接参照することをお勧めします。

図 35

回答企業（収益規模別）

2026年データインフラストラクチャ調査、第8問、N=294

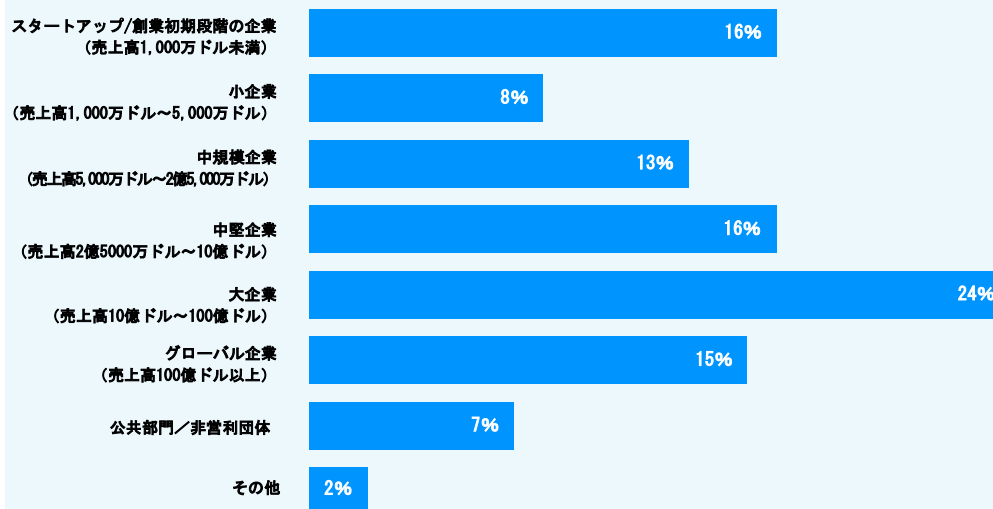
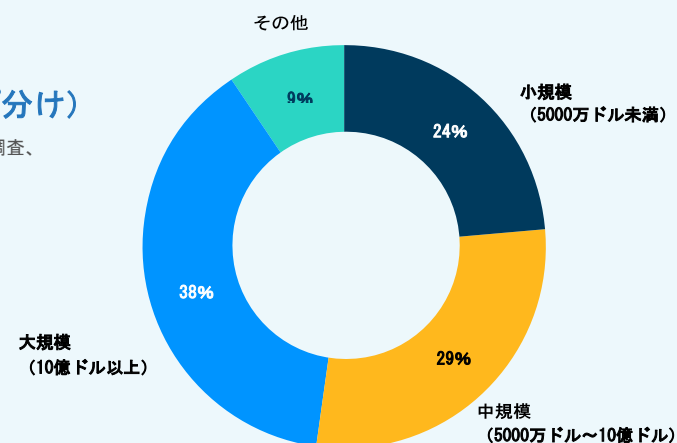


図 36

回答企業 （収益規模別グループ分け）

2026年データ インフラストラクチャ調査、
第8問、N=294



付録

A1：組織に関連するユースケース

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q10、N=294、「上記のすべて」の選択肢を含みます。

以下のユースケースのうち、貴社に該当するものはどれですか？（該当するものをすべて選択してください）	
リアルタイム分析／運用インテリジェンス	79%
ログ分析と可観測性	78%
セキュリティ分析	74%
ビジネス インテリジェンスとレポート作成	72%
AI関連のユースケース	71%
検索／取得	67%

A2.1：組織のツール選択に関する好み

2026年データ インフラストラクチャ調査、第11問、N=294

あなたの組織は、ツールの観点からこれらのユースケースにどのように対処したいと考えていますか？（1つ選択してください）	
コアプラットフォームは1つで、必要に応じて専用ツールも利用できます。	44%
各用途に最適な個別ツール	26%
複数のユースケースをサポートするツール	14%
標準化されたアプローチはない	12%
わからない、または確信が持てない	4%

A2.2：企業規模別組織のツール選好

2026年データ インフラストラクチャ調査、第11問、N=294

あなたの組織は、ツールの観点からこれらのユースケースにどのように対処したいと考えていますか？（1つ選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
コアプラットフォームは1つで、必要に応じて専用ツールも利用できます。	35%	35%	35%	45%	50%	43%
各用途に最適な個別ツール	29%	23%	28%	23%	27%	25%
複数のユースケースをサポートするツール	20%	19%	23%	23%	14%	16%
標準化されたアプローチはない	12%	19%	12%	5%	4%	13%
わからない、または確信が持てない	4%	4%	2%	5%	5%	3%

A3：統合と相互運用性に関する声明への同意

2026年データ インフラストラクチャ調査、第15問、N=294

以下の記述について、どの程度同意しますか？（各行につき1つ選択してください）				
	同意する	同意しない	どちらでもない	該当なし、または不明
コストを大幅に削減できるのであれば、プラットフォームの統合も検討する。	80%	4%	9%	7%
複数の専門システムを管理することは、運用上の負担が大きすぎる。	75%	6%	15%	4%
検索の質と精度は、アーキテクチャのシンプルさよりも重要である。	60%	6%	27%	7%
特定のベンダーやクラウドプロバイダーに依存しないインフラストラクチャの展開は、当社にとって戦略的な優先事項です。	71%	8%	15%	5%
データインフラストラクチャを評価する際には、ベンダー間およびツール間の相互運用性が極めて重要となる。	78%	3%	12%	7%

A4：データ インフラストラクチャ プラットフォーム全体の年間概算支出額

2026年データ インフラストラクチャ調査、第22問、N=294

貴社は、検索、分析、オペラビリティ、および関連するデータインフラストラクチャプラットフォームに年間およそどのくらいの費用を費やしていますか？（いずれか1つを選択してください）	
\$100K未満	22%
\$100K-\$500K	10%
\$500K-\$1M	10%
\$1M-\$5M	16%
\$5M-\$10M	5%
\$10M以上	8%
わからない、または確信が持てない	29%

A5：データ インフラストラクチャ プラットフォームを評価または選択する際に評価される基準

2026年データ インフラストラクチャ調査、第12問、N=294

データインフラストラクチャプラットフォームを評価または選択する際、以下の要素はどの程度重要ですか？（各行につき1つ選択してください）				
	とても重要	やや重要	重要でない	該当なし、または不明
総所有コスト	80%	18%	1%	1%
ベンダーの独立性と導入の柔軟性	69%	23%	5%	3%
エンタープライズ対応状況（例：LTSバージョン、SLA）	67%	27%	3%	3%
地域社会と生態系の健康	53%	40%	3%	4%
セキュリティとコンプライアンス（認証、規制への準拠）	79%	16%	2%	2%
AIとベクトル検索機能	49%	34%	12%	5%
クラウド ネイティブなアーキテクチャとスケーラビリティ	61%	28%	8%	3%
オープンソースの代替版またはコミュニティ主導版が利用可能であること	53%	34%	6%	6%

A6：データ インフラストラクチャのリスクに関する最大の懸念事項

2026年データ インフラストラクチャ調査、第14問、N=294

貴社が抱えるデータインフラストラクチャリスクに関する最大の懸念事項は何ですか？（最大3つまで選択してください）	
セキュリティ上の脆弱性	58%
規制遵守	33%
複数のツールや環境にわたるデータ露出	33%
ベンダー ロックイン	32%
複数のプラットフォームにわたる運用上の複雑さ	31%
データ制御の喪失	27%
ベンダーまたはプロジェクトの不安定性／中止	22%
移行の複雑さと切り替えコスト	22%
テクノロジースタックに関する可視性が限られている	22%
その他	22%
わからない、または確信が持てない	22%

A7：推奨される検索方法

2026年データ インフラストラクチャ調査、第13問、N=294

貴社ではどの検索方法を推奨されますか？（いずれか1つを選択してください）	
ハイブリッド検索	68%
キーワード検索	13%
セマンティック検索／ベクトル検索	7%
その他	1%
わからない、または確信が持てない	11%

A8.1：優先ベンダーとの関係

2026年データインフラストラクチャ調査、第20問、N=294

貴社は、検索、分析、オブザーバビリティ、およびデータインフラストラクチャのサポートに関して、単一のベンダーと連携することを希望しますか、それとも複数のベンダーと連携することを希望しますか？（いずれかを選択してください）	
複数のベンダー／コンサルタント会社	29%
単一ベンダー	28%
社内専門知識	25%
特に希望なし	13%
わからない、または確信が持てない	5%

A8.2：推奨されるサポートモデル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第21四半期、N=291

貴組織ではどのようなサポートモデルを希望されますか？（いずれか1つを選択してください）	
商用／ベンダー提供のサポート	37%
地域に根ざした支援	23%
プロジェクトによって認定されたベンダー	21%
特に希望なし	13%
わからない、または確信が持てない	6%

A9.1：回答者の役割別優先ベンダー関係

2026年データ インフラストラクチャ調査、第20問、N=294

貴社は、検索、分析、オブザーバビリティ、およびデータインフラストラクチャのサポートに関して、単一のベンダーと連携することを希望しますか、それとも複数のベンダーと連携することを希望しますか？（いずれかを選択してください）										
	Cx0	エンジニアリング／インフラ担当副社長	IT担当副社長	データ担当副社長	Platform / DevOps 当副社長	ソフトウェア開発担当	データエンジニア	AI/MLエンジニア	セキュリティエンジニア	オブザーバビリティ担当
複数のベンダー／コンサルタント会社	44%	50%	76%	27%	26%	21%	30%	33%	28%	0%
単一ベンダー	32%	17%	18%	69%	23%	16%	10%	33%	22%	36%
社内専門知識	13%	22%	6%	0%	32%	39%	50%	7%	28%	36%
特に希望なし	10%	11%	0%	4%	12%	13%	10%	20%	11%	18%
わからない、または確信が持てない	1%	0%	0%	0%	7%	11%	0%	7%	11%	9%

A9.2：回答者の役割別で好まれるサポートモデル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第21四半期、N=291

貴組織ではどのようなサポートモデルを希望されますか？（いずれか1つを選択してください）										
	Cx0	エンジニアリング／インフラ担当副社長	IT担当副社長	データ担当副社長	Platform / DevOps 当副社長	ソフトウェア開発担当	データエンジニア	AI/MLエンジニア	セキュリティエンジニア	オブザーバビリティ担当
商用／ベンダー提供のサポート	35%	50%	48%	81%	25%	34%	10%	53%	28%	45%
プロジェクトごとに認定されたベンダー	35%	17%	36%	12%	19%	26%	40%	7%	28%	27%
コミュニティ ベースのサポート	19%	17%	6%	4%	32%	21%	20%	13%	22%	9%
特に希望なし	12%	6%	9%	0%	14%	8%	20%	20%	6%	18%
わからない、または確信が持てない	1%	6%	0%	0%	10%	8%	10%	7%	17%	0%

A9.3：企業規模に応じた優先ベンダーとの関係

2026年データ インフラストラクチャ調査、第20問、N=294

貴社は、検索、分析、オペレービリティ、およびデータインフラストラクチャのサポートに関して、単一のベンダーと連携することを希望しますか、それとも複数のベンダーと連携することを希望しますか？（いずれかを選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
複数のベンダー／コンサルタント会社	15%	17%	58%	39%	44%	37%
単一ベンダー	30%	39%	19%	32%	31%	26%
社内専門知識	36%	22%	16%	14%	14%	23%
特に希望なし	17%	17%	5%	9%	8%	8%
わからない、または確信が持てない	2%	4%	2%	5%	3%	6%

A9.4：企業規模別の推奨サポートモデル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第21四半期、N=291

貴社は、検索、分析、オペレービリティ、およびデータインフラストラクチャのサポートに関して、単一のベンダーと連携することを希望しますか、それとも複数のベンダーと連携することを希望しますか？（いずれかを選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
複数のベンダー／コンサルタント会社	19%	26%	26%	43%	47%	47%
単一ベンダー	15%	22%	40%	34%	25%	19%
社内専門知識	47%	30%	19%	8%	14%	15%
特に希望なし	11%	13%	7%	12%	11%	8%
わからない、または確信が持てない	9%	4%	7%	1%	3%	8%

A10：生産上重要なプラットフォーム に求められる最低LTS期間

2026年データ インフラストラクチャ調査、第23問、N=294

貴社が本番環境において重要なデータインフラストラクチャプラットフォームに対して期待する最低限の長期サポート（LTS）期間はどのくらいですか？（いずれか1つを選択してください）	
12ヶ月未満	12%
18ヶ月	10%
24ヶ月	21%
36ヶ月	21%
48ヶ月	6%
60ヶ月以上	11%
わからない、または確信が持てない	20%

A11.1：地域別、AIワークロードを運用、または運用を計画している組織

2026年データ インフラストラクチャ調査、第16問、N=294

IS YOUR ORGANIZATION CURRENTLY RUNNING OR PLANNING TO RUN AI WORKLOADS/APPLICATIONS/PROJECTS? (SELECT ONE)										
	アメリカ	カナダ	イギリス	EU連合	その他 ヨーロッパ	中国	インド	日本	オセアニア	その他 APAC
はい	90%	70%	91%	82%	85%	96%	56%	100%	60%	89%
いいえ	5%	20%	5%	9%	8%	0%	19%	0%	20%	11%
わからない、または確信が持てない	5%	10%	4%	9%	8%	4%	25%	0%	20%	0%

A11.2：企業規模別、AIワークロードを運用、または運用を計画している組織

2026年データ インフラストラクチャ調査、第16問、N=294

IS YOUR ORGANIZATION CURRENTLY RUNNING OR PLANNING TO RUN AI WORKLOADS/APPLICATIONS/PROJECTS? (SELECT ONE)						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
はい	78%	65%	82%	94%	90%	94%
いいえ	12%	27%	12%	5%	6%	2%
DKNS	10%	8%	7%	1%	4%	4%

※DKNS：わからない、または確信が持てない

A12：主要なAI活用事例

2026年データ インフラストラクチャ調査、第17問、N=245

貴社ではどのようなAIワークロードを実行中、または実行予定ですか？（該当するものをすべて選択してください）	
生成型AI／LLMを活用したアプリケーション	82%
AIを活用した運用分析／可観測性	56%
企業知識／BIアシスタントまたはコパイロット	55%
検索拡張生成（RAG）	51%
文書分析／情報抽出	47%
予測分析／予測	47%
脅威検出／リスク分析	42%
企業データ上の自然言語インターフェース	41%
おすすめ情報／パーソナライゼーション	29%
その他	1%
わからない、または確信が持てない	1%

A13.1：AIアプリケーションの動力源として使用されている、または使用される予定のデータ

2026年データ インフラストラクチャ調査、第18問、N=245

貴社は、AIアプリケーションを稼働させるために、どのようなデータを使用していますか、または使用する予定ですか？（該当するものをすべて選択してください）	
ログ、メトリクス、および運用データ	64%
ビジネスおよび取引データ	59%
セキュリティおよび脅威インテリジェンスデータ	55%
内部知識文書	55%
リアルタイム イベント データ	54%
顧客および行動データ	49%
メール、チャットログ、コラボレーションコンテンツ	41%
製品および在庫データ	37%
外部／第三者データ ソース	27%
その他	2%
わからない、または確信が持てない	2%

A13.2：AIデータへのアクセス

2026年データ インフラストラクチャ調査、第19問、N=245

貴社にとって、これらのデータすべてに単一のプラットフォームからAIアプリケーションを通じてアクセスできることは、どの程度重要ですか？（いずれか1つを選択してください）	
非常に重要	51%
やや重要	33%
重要ではない	9%
わからない、または確信が持てない	7%

A14. 1 : OpenSearch 2026に関する知識

2026年データ インフラストラクチャ調査、第25問、N=294

OpenSearchについてどの程度ご存知ですか？（いずれか1つを選択してください）	
とてもよく知っている	30%
やや見覚えがある	37%
認識はしているが、あまり詳しくはない	22%
全く知らない	11%

A14. 2 : 回答者の役割別のOpenSearch 2026への精通度

2026年データ インフラストラクチャ調査、第25問、N=294

OpenSearchについてどの程度ご存知ですか？（いずれか1つを選択してください）										
	CxO	エンジニアリング／インフラ担当副社長	IT担当副社長	データ担当副社長	Platform / DevOps 当副社長	ソフトウェア開発担当	データエンジニア	AI/MLエンジニア	セキュリティエンジニア	オブザーバビリティ担当
とてもよく知っている	61%	50%	52%	58%	27%	21%	40%	27%	22%	27%
やや見覚えがある	27%	28%	45%	38%	33%	26%	50%	53%	33%	45%
認識はしているが、あまり詳しくはない	10%	17%	3%	4%	25%	32%	10%	7%	11%	27%
全く知らない	2%	6%	0%	0%	15%	21%	0%	13%	33%	0%

A14. 3 : 企業規模別のOpenSearch 2026への精通度

2026年データ インフラストラクチャ調査、第25問、N=294

OpenSearchについてどの程度ご存知ですか？（いずれか1つを選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
とてもよく知っている	32%	26%	42%	42%	51%	48%
やや見覚えがある	32%	30%	33%	45%	31%	21%
認識はしているが、あまり詳しくはない	28%	13%	14%	12%	10%	21%
全く知らない	9%	30%	11%	1%	8%	10%

A14. 4 : OpenSearch 2024の経験

2024年検索・分析調査、Q15、N=689

オープンソース ソフトウェアであるOpenSearchの使用経験について教えてください。（いずれか1つを選択してください）	
実運用環境での使用経験が非常に豊富です。	10%
本番環境での使用経験があります。	9%
試してみた	11%
聞いたことはあるけど、それだけ。	38%
聞いたことがない	32%

A15 : OpenSearchの説明

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q26、N=105、自由回答、任意回答、テーマ別分類

OpenSearchを知らない同様に、OpenSearchをどのように説明しますか？（任意）		
	言及	回答
検索と取得	43	47%
分析、可観測性、モニタリング	36	39%
オープンソースとコミュニティ	31	34%
Elasticsearchのフォーク/代替品	26	28%
AI、機械学習、セマンティック検索	10	11%
拡張性、柔軟性、そしてパフォーマンス	10	11%
肯定的な感情／コミュニティ擁護	8	9%
セキュリティ分析	6	7%
データ インフラストラクチャ／プラットフォーム	6	7%
ベンダーの中立性と独立性	4	4%

A16 : OpenSearchのベンダー中立性とエンタープライズ対応

2026年データ インフラストラクチャ調査、第27問、第28問、N=250

	平均スコア
1から5のスケールで、現在のOpenSearchはどの程度中立的／ベンダー非依存のだと認識していますか？	3. 66
1から5のスケールで、OpenSearchのミッションクリティカルなエンタープライズワークロードへの対応能力をどのように評価しますか？	3. 70

A18. 1 : OpenSearchのAIに対する認識された関連性

2026年データ インフラストラクチャ調査、第29問、N=250

AIアーキテクチャにおけるOpenSearchの役割をどのように捉えていますか？（いずれか1つを選択してください）	
AIアプリケーションのためのコアインフラストラクチャ（例：RAGの検索レイヤー）	44%
サポートコンポーネント（例：検索ツールまたは分析ツール）	33%
AIのユースケースとは無関係	6%
その他	1%
わからない、または確信が持てない	16%

A18.2：OpenSearchのAIに対する認識上の関連性（馴染み度別）

2026年データ インフラストラクチャ調査、第29問、N=250

AIアーキテクチャにおけるOpenSearchの役割をどのように捉えていますか？（いずれか1つを選択してください）			
	Very familiar	Somewhat familiar	Aware of it, but not very familiar
AIアプリケーションのためのコアインフラストラクチャ（例：RAGの検索レイヤー）	61%	48%	21%
サポートコンポーネント（例：検索ツール、分析ツール）	33%	36%	34%
AIのユースケースとは無関係	4%	5%	10%
わからない、または確信が持てない	2%	11%	34%

A19.1：テクノロジースタックにおけるOpenSearchの利用状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、第34問、N=245

現在、貴組織のテクノロジースタックにおいて、OpenSearchはどこかで使用されていますか？（いずれか1つを選択してください）	
はい、本番環境で積極的に使用しています	36%
はい、ただしテスト環境または開発環境に限られます。	18%
いいえ、しかし私たちは計画しています	18%
いいえ、使用する予定也没有ありません。	12%
わからない、または確信が持てない	17%

A19.2：地域別の技術スタックにおけるOpenSearchの利用状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、第34問、N=245

現在、貴組織のテクノロジースタックにおいて、OpenSearchはどこかで使用されていますか？（いずれか1つを選択してください）										
	アメリカ	カナダ	イギリス	EU連合	その他ヨーロッパ	中国	インド	日本	オセアニア	その他APAC
本運用用途	49%	22%	39%	50%	25%	67%	31%	63%	0%	25%
テスト/開発用途	19%	0%	32%	13%	33%	17%	15%	13%	50%	63%
使用する計画	9%	22%	17%	13%	33%	17%	23%	13%	0%	0%
使用予定なし	9%	22%	10%	11%	0%	0%	8%	13%	50%	0%
わからない、または確信が持てない	14%	33%	2%	13%	8%	0%	23%	0%	0%	13%

A19.3：企業規模別、技術スタックにおけるOpenSearchの利用状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、第34問、N=245

現在、貴組織のテクノロジースタックにおいて、OpenSearchはどこかで使用されていますか？（いずれか1つを選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
本運用用途	29%	38%	39%	52%	52%	45%
テスト/開発用途	5%	19%	32%	23%	26%	10%
使用する計画	37%	25%	11%	5%	14%	10%
使用予定なし	16%	6%	9%	7%	5%	12%
わからない、または確信が持てない	13%	13%	9%	13%	3%	22%

A20：認知度と普及率：2026年と2024年の比較

2026年データ インフラストラクチャ調査（N=294）、2024年検索・分析調査（N=689）

OpenSearchについてどの程度ご存知ですか？（2026年） 貴組織のテクノロジースタックにおいて、OpenSearchは現在どこかで使用されていますか？（2024年）		
	2026	2024
本運用用途	36%	19%
実験	18%	11%
OpenSearchの名前は少なくとも聞いたことがある	89%	68%

A21.1：OpenSearchの導入深度

2026年データ インフラストラクチャ調査、第38問、N=128

OpenSearchは貴組織の重要インフラにどの程度組み込まれていますか？（いずれか1つを選択してください）	
本運用に使用されますが、交換可能です	40%
コア システムに深く組み込まれています	23%
実験的または概念実証	20%
ミッションクリティカル	13%
わからない、または確信が持てない	4%

A21.2：地域別のOpenSearch導入状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、第38問、N=128

OpenSearchは貴組織の重要インフラにどの程度組み込まれていますか？（いずれか1つを選択してください）										
	アメリカ	カナダ	イギリス	EU連合	その他 ヨーロッパ	中国	インド	日本	オセアニア	その他 APAC
本運用に使用されますが、交換可能です	32%	50%	29%	64%	57%	25%	33%	17%	0%	29%
コア システムに深く組み込まれています	32%	0%	32%	21%	0%	20%	0%	17%	50%	14%
実験的または概念実証	23%	0%	29%	4%	43%	45%	50%	50%	0%	57%
ミッションクリティカル	10%	50%	11%	11%	0%	10%	0%	17%	0%	0%
わからない、または確信が持てない	3%	0%	0%	0%	0%	0%	17%	0%	50%	0%

A21.3：企業規模別のOpenSearch導入状況

2026年データ インフラストラクチャ調査、第38問、N=128

OpenSearchは貴組織の重要インフラにどの程度組み込まれていますか？（いずれか1つを選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
本運用に使用されますが、交換可能です	25%	56%	52%	36%	29%	26%
コア システムに深く組み込まれています	17%	0%	23%	24%	34%	22%
実験的または概念実証	42%	22%	23%	29%	26%	26%
ミッションクリティカル	17%	11%	3%	11%	7%	22%
わからない、または確信が持てない	0%	11%	0%	0%	4%	0%

A22：使っているOpenSearchの導入形態の種類

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q37、N=128、DKNSを除く

貴社では現在、どのようなタイプのOpenSearch導入形態をご利用されていますか？（該当するものをすべて選択してください）	
クラウド上で自己管理	60%
Amazon OpenSearch Service を介したマネージドサービス	48%
オンプレミスで自己管理	43%
AWS以外のベンダーによるマネージド サービス	9%

A23：OpenSearch導入の進化 （2026年と2024年の比較）

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q37、N=126；2024年検索および分析調査、Q17、N=174；
DKNSの回答は除外

貴社では現在、どのようなタイプのOpenSearch導入形態をご利用されていますか？（該当するものをすべて選択してください）		
	2026	2024
セルフサービス モード		37%
クラウド上で自己管理	60%	
オンプレミスで自己管理	43%	
Amazon OpenSearch Service	48%	
AWS以外のベンダーによるマネージド サービス	9%	12%

A24：OpenSearchがアクティブユーザー に提供しているもの

2026年データ インフラストラクチャ調査、第36問、N=128

貴社ではOpenSearchをどのような用途で利用していますか？（各行につき1つ選択してください）			
	はい	いいえ	該当なし
検索／取得	91%	7%	2%
ログ分析と可観測性	83%	14%	3%
リアルタイム分析／運用インテリジェンス	70%	29%	2%
AI関連のユースケース（例：RAG、ベクトル検索）	62%	28%	10%
ビジネス インテリジェンスとレポート作成	62%	27%	11%
セキュリティ分析（例：脅威検出、SIEM）	52%	37%	11%

A25：OpenSearchはどの程度その機能を提供しているか

2026年データ インフラストラクチャ調査、第40問、N=128

OpenSearchは以下の機能においてどの程度優れた性能を発揮していますか？（各行につき1つの回答を選択してください）				
	期待を下回る	期待通り	期待を上回る	該当なし
検索および取得機能	0%	49%	45%	6%
観測機能	2%	67%	26%	5%
セキュリティ、プライバシー、コンプライアンス	3%	75%	13%	9%
拡張性と回復力	4%	63%	27%	6%
他のシステムやツールとの統合	5%	64%	22%	9%
運用経験	7%	64%	21%	8%
ダッシュボードと視覚化	5%	66%	17%	12%
貢献者とコミュニティ	3%	57%	27%	13%
AIとベクトル検索機能	2%	38%	35%	25%

A26：OpenSearchを採用しない主な理由

2026年データ インフラストラクチャ調査、Q41、N=71、DKNSの回答は除外

貴社がOpenSearchを導入していない主な理由は何ですか？（最大3つまで選択してください）	
認識や理解が限られている	30%
内部の専門知識や運用リソースが不足している	27%
統合または移行の複雑さ	27%
現在のプラットフォームから移行する説得力のあるビジネス上の理由がない	25%
ベンダーの中立性やAWSとの関連性に関する懸念	24%
現在、OpenSearchを評価中	24%
企業の準備状況やサポートオプションに関する懸念	20%
私たちはそれを評価し、別のプラットフォームを選択しました	10%
調達、コンプライアンス、または規制上の制約	9%
その他	7%

A27：OpenSearchを評価している

非ユーザー組織

2026年データ インフラストラクチャ調査、第42問、N=73

貴社は今後12～18ヶ月以内にOpenSearchの導入を検討することにどの程度前向きですか？（いずれか1つを選択してください）	
利用状況の評価や拡大を積極的に計画しています	14%
強力なビジネスケースが提示された場合は評価を検討します	23%
可能性はあるが、現時点では優先事項ではありません	44%
オープンしていません - 現在のプラットフォームに満足しています	12%
わからない、または確信が持てない	7%

A28.1：人気の情報チャンネル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第30問、N=240

OpenSearchなどのプラットフォームに関する情報を得るために、主にどのようなメディアソースを利用していますか？（最大3つまで選択してください）	
オープンソース コミュニティまたはプロジェクト ドキュメント	58%
開発者コミュニティと技術フォーラム	45%
会議、イベント、交流会	29%
動画、ウェビナー、オンライン技術コンテンツ	28%
ソーシャル メディアおよび専門家向けネットワーク（例：LinkedIn、X、Reddit）	28%
テクノロジー関連のメディア報道	25%
ベンダーのウェブサイト、ブログ、マーケティング コミュニケーション	19%
社内チームまたは同僚からの推薦	18%
業界アナリスト企業および調査レポート	18%
ポッドキャストと業界インタビュー	6%
その他	1%

A28. 2：回答者の役割別の人気情報チャネル

2026年データ インフラストラクチャ調査、第30問、N=240

OpenSearchなどのプラットフォームに関する情報を得るために、主にどのようなメディアソースを利用していますか？（最大3つまで選択してください）										
	Cx0	エンジニアリング/インフラ 担当副社長	IT担当副社長	データ担当 副社長	Platform / DevOps 当副社長	ソフトウェア 開発担当	データ エンジニア	AI/ML エンジニア	セキュリティ エンジニア	オブザーバビリテ ィ担当
オープンソース コミュニティまたはプロジェクト ドキュメント	39%	47%	36%	81%	56%	57%	70%	54%	42%	36%
開発者コミュニティと技術フォーラム	30%	47%	39%	65%	42%	61%	0%	62%	50%	18%
会議、イベント、交流会	22%	29%	27%	15%	33%	25%	10%	23%	8%	45%
動画、ウェビナー、オンライン 技術コンテンツ	27%	35%	36%	35%	16%	36%	20%	38%	17%	55%
ソーシャル メディアおよび専 門家向けネットワーク	37%	24%	21%	4%	15%	25%	50%	46%	50%	27%
テクノロジー関連のメディア報道	28%	6%	42%	4%	33%	18%	40%	23%	25%	9%
ベンダーのウェブサイト、プロ グ、マーケティング コミュニ ケーション	34%	24%	36%	4%	20%	11%	0%	0%	25%	18%
社内チームまたは同僚からの推薦	24%	24%	15%	19%	13%	18%	30%	15%	25%	27%
業界アナリスト企業および調査レポート	31%	29%	21%	38%	9%	14%	30%	8%	25%	27%
ポッドキャストと業界インタビュー	10%	6%	9%	4%	9%	4%	0%	8%	8%	0%
その他	1%	6%	0%	0%	7%	4%	0%	0%	0%	0%

A28.3：企業規模別の人気情報チャネル 2026年データ インフラストラクチャ調査、第30問、N=240

OpenSearchなどのプラットフォームに関する情報を得るために、主にどのようなメディアソースを利用していますか？（最大3つまで選択してください）						
	スタートアップ	小企業	中規模企業	中堅企業	大企業	グローバル
オープンソース コミュニティまたはプロジェクト ドキュメント	53%	56%	38%	45%	46%	46%
開発者コミュニティと技術フォーラム	42%	50%	29%	42%	39%	36%
会議、イベント、交流会	29%	38%	27%	19%	25%	29%
動画、ウェビナー、オンライン技術コンテンツ	32%	13%	31%	30%	24%	38%
ソーシャル メディアおよび専門家向けネットワーク	37%	38%	21%	29%	27%	29%
テクノロジー関連のメディア報道	26%	19%	38%	26%	22%	29%
ベンダーのウェブサイト、ブログ、マーケティング コミュニケーション	21%	13%	15%	29%	31%	16%
社内チームまたは同僚からの推薦	5%	6%	29%	16%	24%	21%
業界アナリスト企業および調査レポート	11%	13%	25%	23%	32%	21%
ポッドキャストと業界インタビュー	3%	13%	4%	5%	14%	5%
その他	5%	0%	6%	3%	1%	2%

A29：OpenSearch Software Foundation / Linux Foundation の会員資格

2026年データ インフラストラクチャ調査、第31問、N=250

貴組織はOpenSearch Software FoundationまたはLinux Foundationの会員ですか？（いずれか1つを選択してください）	
はい、両方とも	6%
Linux Foundationのみ	9%
いいえ	67%
わからない、または確信が持てない	18%

A30：財団会員資格取得の条件

2026年データ インフラストラクチャ調査、第32問、N=185

貴社がOpenSearch Software Foundationに加盟するためには、どのような条件を満たす必要がありますか？ （該当するものをすべて選択してください）	
明確なビジネスケース - 正式会員になることによる実証可能な投資対効果またはコストメリット	53%
Enterprise Readiness Proof - 認定されたLTSバージョン、SLA、および正式なサポート オプション	47%
ベンダー中立性への信頼 - OpenSearchが真に独立しているという確信の強化	40%
ロードマップへの影響力 - メンバーとしてOpenSearchの方向性や優先事項を形成する能力	31%
会員限定特典 - 非会員には利用できないエンタープライズ機能、早期リリース、または機能へのアクセス	21%
同業他社による検証 - 当業界の類似組織が既に会員であることを示す証拠	20%
わからない、または確信が持てない	22%

A31：財団会員特典の重要性

2026年データ インフラストラクチャ調査、第33問、N=185

OpenSearch Software Foundationへの入会をご検討されている場合、以下の会員特典はどの程度重要だとお考えですか？				
	非常に重要	やや重要	重要ではない	該当なし
優先度の高いセキュリティパッチと脆弱性に関する通知	79%	14%	3%	4%
18ヶ月間のサポート期間を設けた長期サポート（LTS）	70%	21%	3%	6%
製品ロードマップへの直接的な意見提供	52%	35%	5%	8%
認定ベンダーおよびコンサルタントのネットワークへのアクセス	47%	39%	9%	5%
一般公開前に新機能に早期アクセス	39%	37%	17%	6%

著者について

CSILLA ZSIGRIは、市場調査、テクノロジー系スタートアップ、イノベーション コンサルティングなど、長年にわたる国際的な経験を通して培われた、テクノロジー、イノベーション、戦略的洞察に対する多文化的な視点を提供します。経済学、経営学、ビジネス コンサルティングのバックグラウンドを持つ彼女は、451 ResearchとS&P Globalで10年以上にわたり、テクノロジー業界のアナリスト兼アドバイザーを務めました。また、EUが資金提供する研究開発・イノベーション プロジェクトにも携わり、市場情報と戦略的枠組みを提供することで、初期段階のテクノロジーが現実世界に影響を与えるよう支援しました。さらに、2つのテクノロジー系スタートアップで最高戦略責任者（CSO）を務め、内部から市場ポジショニングと市場参入戦略を策定しました。チラは、新興ベンチャー企業から大企業、欧州委員会のような機関まで、幅広いクライアントに対し、複雑なアイデアを明確で実行可能な洞察へと変換することで知られています。

ADRIENN LAWSONは、Linux Foundationの定量調査ディレクターとして、オープンソースのエコシステムを理解するためのデータ駆動型イニシアチブを主導しています。オックスフォード大学で社会データサイエンスの専門知識を習得し、学術研究と政府研究の両方の経歴を持つ彼女は、分散型コラボレーションネットワークの分析に厳密な方法論をもたらします。Linux Foundationでは、業界や地域を横断する横断的調査を実施するチームを率い、オープンソースの動向に関する包括的な洞察を提供しています。彼女の研究は、規制遵守、AIの影響、持続可能な資金調達モデルに関する実証的調査を含みます。彼女は、オープンソースコミュニティにおける戦略的意思決定に役立つ、エビデンスに基づいた提言を作成しています。

HILARY CARTERは、オープンソースの動向、機会、課題に関する実証的な知見を提供するために設立されたLF Researchを立ち上げ、率いるため、2021年にLinux Foundationに入社しました。Linux Foundationに入社する前は、トロントを拠点とするブロックチェーン技術に特化したグローバルなシンジケート型シンクタンクであるBlockchain Research Instituteのマネージングディレクターを務めていました。彼女は、オープンソースのイノベーションとその業界全体への導入に焦点を当てた約200件の研究プロジェクトに貢献してきました。ヒラリーはLondon School of Economicsで経営学修士号を取得しており、カナダとアイルランドの二重国籍を持っています。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。特に、調査プロセスの様々な段階にご尽力いただいたLinux Foundationの同僚、Lisa Briggs氏、Anna Hermansen氏、Bianca Lewis氏、James McIntyre氏、Kristi Piechnik氏、そしてLF Creative Services、およびHubSpotチームの同僚の皆様に深く感謝いたします。

LF Researchは、二次資料の集約、データ分析、レポート作成支援、校正、翻訳など、研究関連の業務において、生成型AIツールを様々な程度で活用しています。AIによって生成されたコンテンツはすべて、必要に応じてレビューおよび修正されます。

 x.com/linuxfoundation

 facebook.com/TheLinuxFoundation

 linkedin.com/company/the-linux-foundation

 youtube.com/user/TheLinuxFoundation

 github.com/linuxfoundation

2026年9月



Copyright © 2026 The Linux Foundation

このレポートは、the Creative Commons Attribution-NoDerivatives 4.0 International Public Licenseに基づいてライセンスされています。

この研究を参照する場合は、次のように引用してください：

Csilla Zsigri, Adrienn Lawson, and Hilary Carter, “The 2026 Open Data Infrastructure Report: AI, Governance, and OpenSearch Adoption Trends,” foreword by Bianca Lewis, The Linux Foundation, September 2026.



The [OpenSearch Software Foundation](https://opensearch.org/foundation)は、検索、分析、可観測性、およびベクトル データベース ソフトウェアのためのベンダー ニュートラルなコミュニティです。Linux Foundationがホストし、AWS、IBM、SAP、Uberなどの主要メンバーに支えられているOpenSearch Software Foundationは、コミュニティのメンテナー、開発者、およびメンバー組織と協力してOpenSearchプロジェクトの継続的な成長を推進しています。設立以来20億回以上のソフトウェア ダウンロードと数千人の貢献者の参加により、OpenSearchプロジェクトとそのコミュニティは、情報の管理と発見の方法を変革しています。詳細については、opensearch.org/foundationをご覧ください。



2021年に設立された[Linux Foundation Research](https://linuxfoundation.org/research)は、オープンソースにおけるコラボレーションの規模拡大を探り、新たな技術動向、ベストプラクティス、そしてオープンソースプロジェクトが世界に与える影響についての洞察を提供します。Linux Foundation Researchは、プロジェクトのデータベースとネットワークを活用し、定量的および定性的な手法におけるベストプラクティスに取り組むことで、世界中の組織にとって有益なオープンソースに関する知見を得るための頼りになるライブラリを構築しています。

この日本語文書は、英語版を機械翻訳し、The 2026 Open Data Infrastructure Report: AI, Governance, and OpenSearch Adoption Trendsの参考訳として、The Linux Foundation Japanが便宜上提供するものです。
翻訳協力：天満 尚二